段祺瑞氏の風采と動作

も嚴重也。衛兵は勿論、短銃を携へたる警固の者、亦た少からず。

段祺瑞氏は、一寸見たる所、我が京都府の多額納稅者選出貴族院議員田中源太郎氏に肖たり。併し田中氏を知らざる人には、斯く云うたりとて、何等の感興を與へざる可し。小男にして、顏色黧黑、顴骨秀で、眼の玉きよろりとして、極めて落ち著きたる風あり。支那人には、恐らく、珍らしき寡默にして、且つお世辭の少き男なる可し。一見したる所、聰明の人たるや否やは、姑らく置き、多少意志あり、且つ自信ある人の

段總理肯像

如く思はるゝ也。而して何れかと云へば、聊か一本調子にして、鼻先强きに似たり。されど是れ敢て同氏を品隲するにあらず、唯だ予が印象を記するのみ。

馮總統を訪問す

（五二）馮總統

馮總統は、曾て西太后の行在所に、其居を占む。予等は先づ衛兵の整列したる新華門を過ぎ、御用の人力車に打ち乘り、南海の邊、合圍の老楊、高柳の環立する間を、迂廻して行く。舟車隨意なれども、時間の都合にて車行を取りし也。車行約十分。

一見六十恰當の好々爺

總統の謁見室に達するにも、幾多の門、庭、及び細く、長く、且つ曲りたる回廊、特に其の要所々々には、衛兵が銃劍を著けて立番する前を通り、最後に若干の式部官や、侍從武官の、對立する間を通り脫けて、始めて質素なる一小室に出づる也。而して其處に、一見六十恰當の、好々爺の

老練熟達の人

如き者立つあり。問はずして馮國璋氏其人たるを知る。

總統は能く談じ、能く聽く、所謂る老練、熟達の人なる可し。兎も角も現在に於ては、最も安全なる一人として、支那の政治界に調法がらるゝならむ。

南海の横斷と其の光景

予等は歸途には人力車を捨て、舟に乘りて南海を横斷し。袁世凱時代の總統府にして、且つ袁氏自から住し、然も其の以前には、光緒皇帝が幽閉せられ、且つ崩御せられたる、南海中の離島、瀛台に立ち寄り

馮總統肖像

極樂世界に入りたるの感

太湖石峙ち、曲徑通じ、黄色、碧色、紫色、其他各色の瓦にて葺きたる家根の小樹、高樓や、花苑、曲欄の相接する間を環り、更らに舟に乘りて、新華門の前路に返れり。南海も今や枯荷滿面、其の花時想ふべし。舟は家根附にして、何となく威士のそれに似たり。異なる所は、唯だ其の鷁首なきのみ。舟中より回看すれば、夕陽斜めに、瀛台の五彩の甍瓦を射り、而して餘光は、丹壁、白石、緑水、翠楊に映じ、光采陸離、轉〻人をして、極樂世界に入りたるの感あらしむ。予等徙徊去る能はず、されど餘り長居しては、衞兵の爲に誰何せられんとを虞れ、名殘り惜しくも、新華門を出でゝ去れり。

大正六年十月十七日午前六時　北京に於て

（五三）　同舟遭風

今後に於る北方の問題

少くとも、今後の北方に於ける問題は、馮と段との離合如何によりて

決せらる。黎元洪、段祺瑞の葛藤は、延いて張勳の復辟運動に至り、此に馮國璋、段祺瑞の幕は開かれたり。

馮段の合離如何にあり

彼等は均しく武人出身にして、且つ何れも袁世凱の門下生也。されど其の行徑、性格は、合すれば相補ふに足り、離るれば相敵するは足る。問題は合離如何にあり。

兩人契合の楔子

馮は調和性に饒む、其弊や優柔不斷也。段や勇往也、されど多く敵を作る。前者若し兵權を有して學識を有せざる馮道なりとせば、後者は王安石より學問と、經綸とを控除して、更に若干の武事的習練を加味したる也。馮は、アスキスの『姑く待て』主義なれば、段は、ロイド・ジョジの『直ちに行へ』主義也。されど今日の所は、此の兩人も同舟遭風の境遇中にあり。此の一事は、少く共現時に於ける、兩人契合の楔子なるべき歟。

大正六年十月十七日朝

兩人は遂に乖離して、段内閣の辭職を、大正六年十一月に見たり。而して形勢は更に轉々して、再び段内閣の成立を、大正七年三月に見たり。未だ今後の成行如何を知ず。

著者

（五四）雍和宮

愉快なる一日

十月十七日は、午前に雍和宮と、孔子廟、及び國子監とを見、午後に段芝貴氏を訪問し、北海を見、更らに梁啓超氏を訪問せり。要するに亦た愉快なる一日にてありき。

* * * * * *

雍和宮を見る

雍和宮は、雍正帝の潛邸を、登極の後喇嘛寺に喜捨したるもの、是れ蒙古懷柔の政策より出でたること、今更ら言ふ迄もなし。寺僧三百、概ね蒙古人也。而して寺の大成は、乾隆帝に待ち、佛壇、香爐、額聯等、悉く乾隆ならざるはなし。予等は恰も蒙古僧等の、勤行時に出會せり。中央の大堂に、大小の僧侶、相ひ駢坐して、唄音面白く、諷經しつゝあり。而して其の小僧坊主抔には、外來の觀者を偷視して、一寸舌を出す惡戯者もあ

蒙古僧等の勤行時に出會

北京雍和宮

り。將た左右の小堂内にも同樣にして、大鼓、鈸抔加へ、一種の囃子めきて、聽くに興多し。彼等は黄衣、若しくは海老茶衣を著け、其の僧帽は羊毛にて製し、其形恰も我が大禮服帽に似たり。予等が寫眞機を取り出したるを見て、是非自分等も撮影し呉れとて、其前に立ちし僧あり。彼等も隨分世間馴れたりと覺ゆ。門を出でんとするや、一人あり、頻りに佛像を懷中より出して、之を購はんとを求めたり。

孔子廟の石鼓と古柏樹

（五五）孔子廟と國子監

孔子廟に於て見る可きは、例の石鼓也。元の許魯齋の手植したりと稱する、數十株の古柏樹也。元代以來の進士題名の石碑也。所謂る大成殿には、從前の康熙以來、歷代の勅額、一切取り除けられ、唯だ一の黎元洪筆蹟の額あるのみ。是亦た現代式と申す可き歟。但だ此處の古柏樹丈は、六百年の面影依然たり。洵に珍重す可し。石鼓も文字は剝落しつゝも、其石は尚ほ存す。せめて此丈は、永久に保存したきもの也。

國子監と乾隆御刻の石經

孔子廟の石鼓

轉じて國子監に赴かんとすれば、兒童の一群、予等を追躡して、『進上』『進上』と喚叫す。何事にやと尋ぬれば、日本人に向て金錢を要

孔子様にも多少の案内料

國子監

請するなりと云ふ。彼等自から進上するにあらず、予等に向て進上せしむる也。國子監には、『歴史博物館』との、現代的標札を掲げたるも、何物もなし。但だ數片の唐、宋、明の石碑あるのみ。然も乾隆御刻の石經は、依然として、其の門廡の回廊を環りて建てり。

前述兒童の臨時乞丐は姑らく措き、一門の出入毎に、金錢の要求には、見物客も聊か癪に障らざるを得ず。特に場所が孔子様の廟丈に其感尤も切ならざるを得ず。併し

孔子廟大成殿

支那通より見れば、是亦た尋常一様の事のみ。役人の門番にさへ賄賂せねば、面會が出來ぬとあれば孔子様にも、多少の案内料は勿論の事也。

南海に比して更に大也

（五六）北海の大觀

前日南海を見、今又た北海を見る。而して北海の觀は、南海に比して、更にに大也。宮城西華門の西に苑あり、所謂る西苑也。其中に、玉泉山の水

を引きたる巨浸あり、之を太液池と稱す。其池を三分して、一を北海と云ひ、二を中海と云ひ、三を南海と云ふ。今や大總統府は、中海と、南海との間にあり。北海と、中海との間に橋あり、玉蝀橋と云ふ。予等は團城を貫き、過般約法會議の場所たりし承光殿を過ぎ、瓊華島に赴く。島中に寺あり、東光寺と云ふ、其上に山あり、白塔山と云ふ、山頂に大喇嘛塔あり。此の山頂に登れば、宮城の最高所たる景山の五樓閣は、殆んど手に取る可し。而して北京の鳥瞰圖は、拭ふが如き秋天の下に、鮮明に披展せらる。予は此山に登りて、實に北京が一大森林たるに氣附けり。而して其樹は、古槐、老楊柳、及び柏樹也。更らに目を騁すれば、近郊の古塔、巨閣は勿論、大行の山脈、蜿蜒として天外に趨りつゝあるを望む。斯くて予等は、背面より山を下り、幾許の樓閣、回廊を過ぎ、乾隆帝三希堂法帖の石刻を、其の周圍に嵌めたる碑屋に赴き、其の精美なるに垂涎し、茲に瓊華島を一週したり。

白塔山上の展望

北京及び近郊の光景

喇嘛塔上より景山を望む

北京　北海瓊華島大喇嘛塔の遠望

喇嘛塔上の陶製壁佛

太液池邊柳絮飛墨山樓閣鬱巍巍
人家百萬秋光裡白塔峰頭看落暉

瓊華島は、袁世凱若し天子たらば、之を皇太子、即ち袁克定の宮殿となす可く、準備したりとの事にて。其爲めにや、東光寺の佛像も取り除けられ、一切の家屋其他、聊か修理の痕なきにあらず。されど最近復辟騷動の際、共和軍の占領したる後なれば、其の狼藉や知る可きのみ。但だ依然舊觀を改めざるは、牛溲馬勃の中に屹立したる、乾隆御製『瓊島春陰』の詩碑と、喇嘛塔と、三希堂の石刻のみ。

大正六年十月十八日午前六時　北京に於て

（五七）　段芝貴と梁啓超

武斷派中に屈指の一人

段芝貴氏は、本來段祺瑞氏と、袁に取りては、左右の手たりし也。然も一の段は總理たり、他の段は北京衛戍の閑職にあり。されど芝貴其人も、春秋に富み、前途多し、北洋武斷派中に於ては、屈指の一人ならむ。彼の家は鐵獅子胡同（ホートン）にあり。其の園池、頗る瀟洒なり。之を主人に尋ぬ

鐵獅子胡同の家

支那に於ける唯一の新聞記者

段芝貴氏肖像　梁啓超氏肖像

れば、是れ吳三桂の寵姫、陳圓々の舊宅にして、今は其三分の一に縮められたりと云ふ。彼は愛相善き、利け物也。梁啓超氏には、財政部にて面會せり。彼は支那に於ける、唯一の新聞記者ならむ。今や大藏大臣の劇職にあり

『杜甫と彌耳敦』の愛讀者

予等の先客は、英國公使たりき。彼は頻りに予の『杜甫と彌耳敦』を賞讃し、足下の文、一として通覽せざるなしと云へり。彼は何ぞ新感想はなき乎と問ふ。予は別にさるとなし、但だ貴國には米屋、薪屋、酒屋、餅屋と同樣に、錢屋ありて、錢を貨物同樣、一種の商品として取扱ふ。此丈が新來の旅客には、閉口也と答ふ。予は彼と舊相識なれば、種々の談話を交換したり。

今や梁啓超は下りて野にあり、段芝貴は進んで陸軍總長たり。

著者

大正七年四月一日

（五八）　琉璃廠と隆福寺

古書肆の藪淵を見舞ふ

予は北京に入りて、先づ琉璃廠を見舞へり。更らに昨十八日を以て、隆福寺街を見舞へり。兩者は古書肆の藪淵なれば也。而して獲る所ありしやと問ふ人あらば、遺憾ながら無しと答へんのみ。

支那は實に大國

支那は實に大國也。一方には革命騷ぎの最中に、他方には古董、舊書を玩び、此が爲めに千金を投ずるを、辭せざるものあり。而して舊書や、舊家の零落と與に、隨時市に出づるあるも、殆んど右より左に顧客あるが如し。

善本少なし

北京隆福寺街文奎堂書店に於けるる蘇峰學人

予は半日の閑を消したるも、宋、元の舊槧は勿論、明板の精善なるものさへ、容易に見出さず。偶〻一寸欲しきものと見れば、法外の掛値にて、擊退せらる。

古書肆と製本術

此の方面にては、何れの古書肆も、製本業を兼ね、其の店裏には、蠹蝕手にす可らざる書籍を、殆ど昨日出版したるかの如く、修理しつゝあり。製本にかけては、日本は到底支那の敵にあらず。然も餘りに手際の善きが爲めに、其の本來の古色を損するは、所謂る過たるは猶及ばざるが如きの類歟。

『殊域周咨錄』十册

但だ聊か同人に誇る可き一は、『殊域周咨錄』十册也。此れは珍書にあらず、されど明の萬曆癸未の出版にて、記する所は、朝鮮、日本、琉球、安南、及び南洋諸島に及ぶ。博覽の君子に取りては、遼東の豕たる可きも、我が成簣堂には、從來藏儲せざりし一也。

大正六年十月十九日朝　北京に於て

（五九）　名士歷訪

十月十八日午後は、交通部總長曹汝霖、內務部總長湯化龍、及び元老徐

世昌氏を歴訪せり。

曹氏は段内閣の花形

曹氏は段内閣の花形役者にして、即今日の出の勢あり。其の官職は我が遞信大臣にして、鐵道院總裁を兼ねたるものなるも、對外、特に對日本の交渉抔には、毎に其衝に當りつゝあり。或人は後藤、仲小路を撞き交ぜて、之を等分したるが如しと云へり。未だ其の當否如何を知らず。予等の訪問したるは、其の自邸にして、室内には伏見宮殿下を始め、大隈侯其他の

曹汝霖氏肖像

『國民叢書』の愛讀者

寫眞を飾りあり。彼は快活なる四十年輩の男にして、善く日本語を操れり。彼は早稲田在學の頃は、我が『國民叢書』の愛讀者たりしと云へり。過日張繼氏に、東京にて面會の節も、同樣の言を做せり。眇乎たる『國民叢書』が、支那の新知識諸君に貢献したる所ありとは、著者の頗る意外とする所也。

湯氏は進歩黨の代表者

湯化龍氏は、進歩黨の代表者として、梁啓超氏と與に、現内閣にあり。氏は黨人としては、重きを做せり。されど内相としては、地方の政務、殆んど各省督軍の擅にする所となりて、手を拱して、唯だ其の成行を見るの狀態にあるが如し。氏自から嘆息して、文治が武斷の桎梏を脱する迄は、内務行政の擧ることは、到底駄目なりと語れり。予は特製『世界の變局』を贈りしに、氏は之を手にして曰く、既に此書を購讀せり、否な『時務一家言』も購讀せり、而して『杜市と彌耳敦』も、目下註文し置けりと氏は日本語に嫻はざるも、讀むには差支なしと云ふ。予等は内務部に

著者の述作を購讀

於て會見したるが、其の會見中にも、幾許の名刺は持ち運ばれたり。而して待合所には、人の出入頻繁たり。恐らく獵官者の類ならむ。

光榮の徐世昌氏

徐世昌氏は、袁世凱と兄弟分にして、今は曹汝霖陸宗輿等の親分たり其の出身は翰林にして、明の開國元勳中山王徐達の裔也。門地、學識、經歷、資望、兼ね全し。乃ち我國の所謂る元老とも云ふ可き位地を、現在に於て占めつゝあるは當然也。

徐氏の家

徐世昌氏官像

其の門前には、幾許の兵士立番せり。庭内には、未だ開花せざる菊の鉢を、僅かに足を容るの地を除きて、一面に並べ列ねたり。室内には『ダリヤ』の盆栽あり。氏は七十恰當の年齢にして、然も尤も健康らしく見受けらる。其の態度風采、如何にも學者的政治家らしく思はる。予貽るに成簀堂叢書の『淮海挈音』を以てしたるに、氏は直ちに披見し、酬ゆるに自著『退耕堂集』を以てしたり。十七、十八兩日の諸名士訪問に、悉く坂西少將の手引きを煩はしたるは、予等が最も感謝する所也。

徐世昌氏の風采と態度

大正六年十月十九日朝　北京に於て

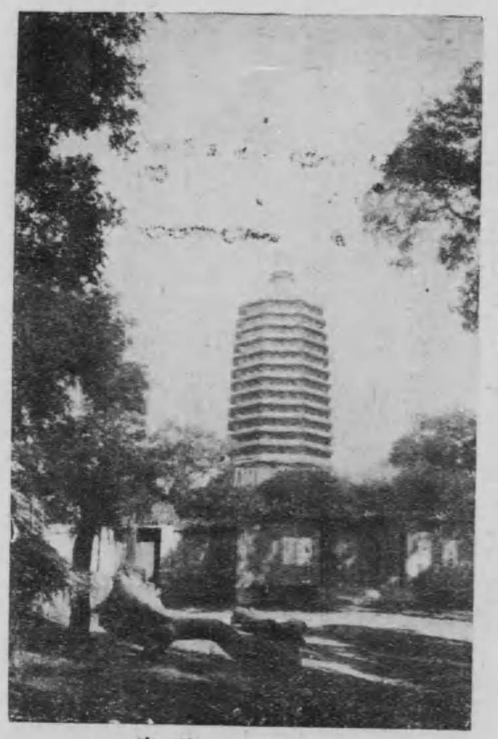
（六〇）　天寧寺と白雲觀

天寧寺の荒廢

十月十九日、天寧寺に遊ぶ。寺は隋代の建設にして、其の十三級の磚塔中には、佛舍利を安置し、登臨するを得可し。蓋し屢々修理を經、最近乾隆帝の手を煩はしたるは、御製の碑文にて知らる。但だ今や全く荒廢

自雲觀と十二年前の觀主高仁峒

し、塔下野菊脛を沒す。而して明時嘉靖年號を記し、『皇帝萬歲萬々歲』と銘したる釣鐘の如きも、蔓草の裡に拋却しつゝあり。予等は門に入らんとして、蒙古犬に獰猛に吼えられたり。廣大なる寺域に、住僧四人のみと云へば、犬に番せしむるも當然ならむ。



北京天寧寺

轉じて白雲觀に赴く、是れ耶律楚材と與に、元帝に寵用せられたる丘處機長春眞人の開基にして、金の太極殿の故墟と云ふ。予は十二年前、此處の客室にて、觀主高仁峒の饗應に預りたるあり、今ま之を訪へば、已に十年前に沒したりと云ふ。彼は西太后に寵せられ、政治上の機密に通じ、此が爲めに、當時日露の兩國使臣より、引張凧となりし程にてありき。歩を後園に移せば、寂として人なく、太湖石を全面に掩うたる蔦は、半ば紅葉しつゝあり。予豈に『前度劉郎今復來』の感なからんや。

概して此邊の光景は、東京近郊の武藏野に似たり然も白菜畑の隣には、群羊の遊ぶ

清懷の清氣に今日の消閑

北京白雲觀　此の牌樓は日本國の寄附に係る

あり。楡槐の蔭には、駱駝の往來するあり。其間を汽車が烟を吐き、駛りつゝあり。而して仰げば、古塔天に聳え、望めば故壘眼を遮る。予は此の小春日和に、滿懷の清氣を吸ひつゝ、杖を打ち振り、半日の閑を消したり。

半畝園の雅集と其の會書

（六一）半畝園の雅集

十月十九日午後は、外交部總長汪大燮氏を訪問して、更らに有賀博士と與に、半畝園に、北京文人、學士の雅集に赴けり。此園は李笠翁の築造したるものにして、滿洲貴族景賢氏の邸也。氏は好古の士にして、現官は副都統たり。其の姓は完顏にして、金の舊宗室たり。而して其の收藏の富、北京中屈指の一たりと云ふ。會者は清宗室の寶熙、七歳にして能詩の神童たりし、湖南の易順鼎、江蘇の楊壽樞、英語に通じ、丹青に妙なる浙江の金紹城、我邦に屢〻來往したる藏書家にして、現官大理院々長董康、及び座中獨り辮髪を垂れ、宣統帝に奉仕しつゝある、前翰林の袁勵準等の諸君也。所謂る逸品持寄會にて、云はゞ天狗鼻合會也。然も主人を以て、其の魁と爲す。主人一文あり、曰く、

逸品持寄會

汪大燮氏肖像

拙藏六朝唐宋元明字畫。有著錄歷史堪資考據者、不下數十事、向不於燈下酒邊展閲。此次蘇峰先生來華、故破例檢出十餘種、表歡迎。若欲俱觀、須訂期于午間、到園賞鑒、靜坐研究、願細加討論評定、甲乙質之。

大法家以爲何如。

舊式の晩餐

右の次第なれば、法書、名畫、逸品、神品、何れも人をして目眩せしむ。其の披陳は、玲瓏池館に於てし、晩餐は其の正堂たる、雲蔭堂に於てせり。而して家も、人も、料理も、献立も、何れも悉く舊式にして、唯だ僅かに石油らんぷを用ひたる丈が、新式と云へり。予は我が成簣堂叢書の若干を會に持ち出したるに、殆んど奪ひ合にて、分捕せられたりき。中にも淮海挐音と、日本書紀とは、最も好評なりしが如し。

大正六年十月廿日朝　北京に於て

(六二)　團城の午餐會

梁啓超氏の午餐會

昨日は梁啓超氏の午餐會に、團城に赴く。團城は北海に臨み、海中の瓊華島と相對す。團城とは、磚にて築き上げたる平臺也。其上に承光殿あり。而して梁氏の寓は、殿側の壁上にあり。景山、白塔山、玉蝀橋、皆な窓中より指點す可し。一支那官人、予に揖して曰く、御身は日本の梁啓超にして、梁氏は支那の德富蘇峰なりとは、我等同人間の評判なり。知らず御身の所見奈何と。予曰く、未だ其の當否を知らず、但だ日本の梁啓超は、不幸にして未だ此の如き、佳邸宅に住するを得ざるのみと。

北京にて東京の天麩羅を談ず

曹汝霖氏は、頻りに日本料理通を振り廻はし、談は端なく天金の天麩羅に及ぶ。予も亦た一個の天麩羅博士也、豈に沈默するを得んや。乃ち逐條審議に入りて、橋善より魚河岸に至り、底止する所を知らざらんとせり。北京の御馳走の席上にて、東京の天麩羅を談ず。張翰が鱸魚の膾を憶ふも、偶然にあらざる也。

承光殿と觀音の坐像

承光殿は、遼の蕭后の粧樓とも云ひ、又た金の章宗の寵姫、李宸妃の妝臺とも云ふ。乃ち約法會議の場所にして、中華民國に取りては、新しき歴史の場所也。其中に白玉の觀音の坐像あり。其の容貌の端麗なる、殆んど人を魅殺し、戀殺し、愛殺せんとす。與謝野夫人は、鎌倉の大佛さへ

塵界奔走佛惠に孤負

も、美男子と謠へり。されど此の玉佛に至りては、眞に好女の典型たるに庶幾し。予は梁氏に向ひ、公は此佛に隣し、定めて永夜の寂寥を、慰するならんと云へば、彼は頭を掉りて、塵界奔走、佛惠に孤負する多しと云へり。殿前に碧玉製の大香爐あり、時價百萬元と稱す。其側に虎松あり、葉は松にして、幹は白く、其皮は紫薇樹の皮の如く、自然に剝脫しつつあり。蓋し奇樹也。

大正六年十月廿一日朝　北京に於て

（六三）　支那の魔力

事實に於て被征服者

予等は今朝を以て、南口より張家口に、更らに大同府に赴かんとす。北京は春秋の燕國にして、大同府は晉國也。

支那には何と申しても、多少の奥行あり。暫らく滯在すれば、何となく人を吸ひ込む力あるを覺ゆ。古今一切の征服者が、却て事實に於て、征服せられたるも、偶然にあらず。

支那人の辭令と料理

支那人の辭令は、人を魅するに餘あり、支那の料理は、人を嬰かしむるに足る。予或る支那人に向て、餘事は兎も角、口に關しては、貴國は世界第一ならんと云へり。蓋し辭令の妙と、料理の精とを意味する也。此の御馳走と、此の御世辭とに取り捲れて、尙ほ懷柔せられざる者あらば、そは所謂る强者（したかもの）の一人なる可し。

政局以外に歷史的興味

北京は一週間居りても可也、一年居りても不可なし。其の現在の走馬燈的政局以外に、歷史的興味頗る多ければ也。近作あり、

太液池邊柳葉飛。　景山樓閣鬱巍巍。　人家百萬秋光裡。
白塔峰頭看落暉。

是れ北海に於ける所見也。

遼金遺蹟剩層臺。　約法議成民國開。　玉佛何關塵世事。
慈容含笑迓人來。

一視同仁の觀音坐像

是れ團城に於ける即興也。前回の通信と參照あらば、詩中の意義自から分明ならむ。白玉の觀音樣には、排日もなく、親日もなし。一視同仁、如何にもにこ〳〵して、愛相善き風情也。

大正六年十月廿二日午前五時　北京飯店第四號室に於て

北京より十三陵

（六四）　明の十三陵

京綏鐵道と支那人の誇り

南口の鐵道ホテルより啓上。

十月廿二日午前八時過ぎ、北京西直門外の京綏鐵道停車場より上車此の鐵道は明治三十八年より起工し、塞外の綏遠城迄達す可き見込にて、今は張家口を經、大同府より豐鎭に通ぜり。資本も、技師も、一切支那人持にて、乃ち支那人の誇りの一也。予が十二年前、此の附近に遊びし際には、恰も工事最中にて、實は出來榮如何と心配したりしが、思ふよりも、產むが易しとは此事也。技師長は詹天祐氏にして、米國ユールの大學の出身と聞く。仰山にも駱駝轎に乘りて往來したりし、曾遊を想へば、今昔の感に禁へざる也。

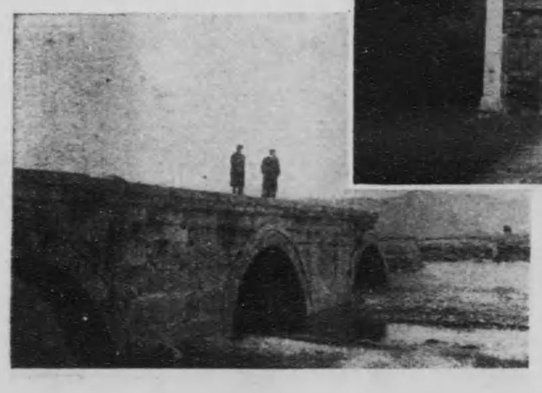
南口には十一時過ぎに著し、直ちに椅子轎に乘じて、明の十三陵に向ふ。此日秋陰、時に日光を漏らすも、聊か冷氣を覺ゆ。高粱は刈り盡し、落花生は掘り盡し、薩摩芋は收穫最中にして、已に麥の青芽を發するあり。又た三頭の牛、若しくは三頭の馬を列ねて、鋤き返し、麥蒔の準備を爲すもあり。滿郊の秋色、楊柳は疎黃に、柿や、梨の葉は殷紅也。而して遙かに長城の支線たる殘堞の、谷より嶺に駛るあり。烽火堡の峰頂に峙つあり。羊や、山羊の群がるあり。馬や、牛の野飼せらるゝ

明十三陵の石駱駝

明十三陵陵道所見

明十三陵中の長陵

明長陵三陵の中牌奥の門



廢墟の石橋

あり。詩思、畫趣、史情、人を惱殺せずんば止まざる也。

石駱駝の上に立て撮影

予等は、十三陵の入口なる白石坊、即ち大理石造の五架大牌門の下にて、サンドウィチを喫して行く。陵道荒廢、橋梁墜落、而して其水清淺、明澄鏡の如く、遊魚少からず。予は曾て雨衣を頭より被りつゝ、陵道に立ち列ぶ石獸中の一なる、石獅の上に立て、撮影したり。今回は、其の斜め向に在る石駱駝の上に立て、又た撮影せり。久濶の石獅、果して十二年前の予を、憶起したりや否や。

長陵と大殿

進んで天壽山の麓に至れば、長陵あり。其の門前の柿葉は、楓よりも紅也。門を入れば、大殿あり。之を過ぐれば、老松、老柏、而して最も多く老槲（オーク）の柯を交ふるあり。特に其の葉の霜を經て、焦茶、淺黄、薄茶、琥珀、其他の色彩に染め成したる、得も云はれぬ風趣あり。無骨の老槲、亦た自から粧ふを解する耶。此れより甬道を踏んで上れば、直ちに明樓に出づ。樓

明樓上に立つ

上に『成祖文皇帝之陵』の大字碑あり。樓より望めば、遠くして十三陵

の鳥瞰圖、近くして長陵の面目、皆な眼中にあり。予等は更らに樓後の寶域、即ち陵墓の、山よりも大なる、土饅頭上に秋草を踏み分けて躋れり。永樂帝の建文帝に於ける、猶ほ天武天皇の大友皇子に於けるが如し。帝は正人君子にあらざるも、明代の皇帝としては、太祖を除けば、恐らくは第一流の豪傑たりしならむ。

明成祖文皇帝之陵

石人不語立秋風。楊葉疎黃柿葉紅。十二帝陵荒艸裡。壽山終古屬鳥雄。

歸途は景山にて自から縊れたる、崇禎帝の思陵を徑して、午後五時半に着宿せり。晩餐の後、汽笛の聲を聞きつゝ、燭を點じて、直ちに本文を草す。明晩は張家口に一泊の豫定也。

大正六年十月廿二日午後七時十五分　南口鐵道ホテルの食堂に於て

南口より青龍橋

（六五）　飈輪容易過居庸

三關の絶景と途上の關目

張家口驛の特別車より啓上。

十月廿三日は、南口にて北京發張家口行の急行車を、待ち合はす可き處。南口驛長の氣轉にて、午前八時十分、同所發の貨物車に便乘し、青龍橋迄赴き、其處にて待ち合はすことゝせり。南口より青龍橋迄は、所謂る三關の絶景にして、路は險崖を縫うて登る。汽關車は後より推し予等は車箱正面の外部に、椅子を並べて坐し、車は徐々に進行す。恰も特別に觀覽車を仕立てたるに似たり。但だ予は鐵欄に麻絲を繫ぎ、それを手にして、搖り落されざらん用心をなせり。此日里は晴、山は陰、白雲は劍鋩を列ねたる如き、連山の頂を徂徠し、楊柳、楡樹、梨、柿、其他あらゆる崖樹は、錦の如く、而して秋水清淺、石に激して駛る。其間に廢塹、荒城、殘堡、壞臺相接す。而して汽車は、居庸關を横に避けて行く、支那人の所謂る居庸關山洞を出づれば、居庸關の光景は、俯視す可し。居庸關には、唐の高適以來、金、元、明、清の諸作家、何れも題詠甚だ多し。予豈に一詩なかる可けんや。

居庸關と諸家の題詠

居庸關附近の舊道

峥嶸山勢白雲封。
天塹關防知幾重。
崖樹秋深葉如錦。
飈輪容易過居庸。

三關とは、南口也、居庸關也、上關也。而して此間に、幾條の長城の支線あり。又た塹堡あり、城寨あり。而して自然の破壞と與に、汽車線路開鑿の爲めに、隨處人爲的に破壞せられたるもの少からず。彈琴峽も、汽車は斜めに避けて行く、曾て道上より見上げたる廟は、今や汽車より見下ろす可し。彈琴峽山洞（とんねる）を過ぐれば、已に青龍橋に著す。時に十時前二十分也。

隨處人爲的に破壞

大正六年十月廿四日午前五時

八達嶺より張家口

（六六）　八　達　嶺

大往還も荒廢せり

八達嶺と長城の破壞

八達嶺關外の遠望（此の關門に北門鎖鑰の額を掲ぐ）

予等は青龍橋にて下車し、直ちに線路を傳うて、八達嶺に向ふ。鐵道開通と與に、張家口より北京に達する、此の大往還も、殆ど荒廢せり。八達嶺頭に至れ

駱駝隊商の往來

意外にも特別車の用意

八達嶺關外の駱駝隊

ば、十二年前の老槐、影濃なる樹は、今や其の痕だになし。而して其長城の破壞や、一層目覺ましき狀あり。予等は長城の上に立ちて、此より行く可き北方を望めば、隊商の駱駝群は、其の頸に掛けたる鈴を鳴らしつゝ、悠々と『北門鎖鑰』と大書せる、關門に入り來らんとす。

鐵道開通以來、駱駝隊商の往來は、從前に比して、殆んど十分の一に減じたりと云ふも、尙ほ此の如し。開通前の光景想ふ可き也。

予等は十一時二十七分の急行車を待ち合せ、青龍橋より乘車せり。然も意外にも、北京より予等の爲に、支那人の公用車——吾人の特別車——一輛に案内者一名、給仕兼料理番一名を附し來りたるは、予等の此行に、多大の便宜を與へられたるものとして、交通部總長曹汝霖氏始め、其向の官憲に感謝せざる可らざる也。本文を艸するを得たるも、畢竟此の便宜による。

八達嶺山洞の奔過

（六七）　八達嶺より張家口

新保安店より張家口迄の途上

予等は已に、筩を八達嶺の頂に立てたり、今や汽車は八達嶺山洞（とんねる）をりつゝあり。墜路長三千五百八十尺、洞を出づれば、一望渺然。此れより汽車は大平原を行く。回看すれば、峻峰は頽波の如く、重疊として東西に亙り、而して長城は其上を蜿蜒し、隱見指點す可し。

予等は新保安店にて午餐す。此處は涿鹿縣に屬し、今は葡萄、梨、林檎等の名產地也。此れより汽車は鷄鳴山を望んで行く、山形平野に孤起し、

八達嶺上の長城

四壁危崖、鋸を立てたるが如し。其上に寺觀あり。隨處石炭を狸掘(たぬきぼり)に掘りつゝあり。此の附近の平原が、即ち涿鹿の野にして、黄帝が蚩尤と戰ひし所也。此より宣化府を經て、張家口に達す。汽車河に副うて行く、河は桑乾河の上流也、水流多く且つ渾る。上流に大雨ありしを知る。宣化府は、周に於ては幽州にして、秦には上谷郡たり。今尚ほ一の都城あり、城壁の大を以て、其の往時の繁榮をトす可し。三時七分張家口に達すれば、日支兩國の諸

君若干來迎し、直ちに三井洋行に拉し去らる。

(六八) 張家口

蒙古に接する咽吭

張家口は、蒙古に接する咽吭にして、所謂る邊關重鎭也。浦港の開くる以前は、露商此處に來りて、貿易に從事せり。今や米國の蒙古貿易に著眼する者、亦た此地より庫倫に、自動車交通を開かんとす。八達嶺より此處迄を內

察哈爾都統 田中玉氏肖像

關と云ひ、此處よりを外關と云ふ。此地は漢代に於ては、代郡北塞たり、後漢に於ては、烏桓鮮卑校尉の治所たり。

田中玉氏を訪問

予等は先づ察哈爾都統の田中玉氏を、都統府に訪ふ。氏轅門を開いて迎ふ。氏は已に吉林の督軍に榮轉し、不日赴任す可しと云ふ。（此事の中止せられたる事情は、後文に詳かなり）氏は一見偉丈夫にして、恰も關羽に似たり。此れより市街を見物して、大境門を出づ。門外は即ち蒙古也。市街には毛皮商最も多し、而して蒙古人が赭顏、秀顴、纏頭して淺絳色の寬衣を著け、馬に鞭ち、若しくは駱駝に騎りて、市中を往來する樣は、人をして米國土人を聯想せしむ。馬に駄して關を出づるもの、概ね磚茶也。漢口にて露人之を製し、遠く蒙古に鬻ぐもの也。

蒙古人の風采

人力車に後押附の見物

予等は人力車に、後推を附けて行けり。されど泥深き三尺、道は石疊なれども、隨處陷落し、車上の人は、波上の舟よりも振盪せられたり。蓋し此道は、幾千萬頭の駱駝、馬、騾、驢等が、幾百年間、蹈み荒したる其儘のものならむ。街上の人は、人力車を見て、頗る珍らしがれり。張家口、人口平生七萬、冬期十萬、而して人力車僅かに四輛也。其の驚異の目標となるも、當然也。

張家口市街

汽車で歸りて安眠

されど大境門外の、長城の殘堡の大壞壁に、英米煙草トラストの大廣告を、塗畫したるが如きは、奇とや云はむ、怪とや云はむ。夜は三井洋行にて、晩餐の饗應に預かり、汽車中に歸りて安眠せり。最早發車の期近きたれば、此にて泉筆を拋つ。張家口に於ける短時間の見物

は、一に三井洋行の宮崎嘉市君等に負ふ所多し。

大正六年十月廿四日午前七時　張家口驛特別車の一室に於て

張家口より大同府

（六九）　登々鐵路傍羊河

張家口を發す

四千八百尺の高原、支那山西省大同府停車場の汽車中より啓上。廿三日の夜、張家口停車場に、特別汽車を停むるや、恰も大海中に孤舟を泊する如く、車體動搖甚だし。亦た以て朔風の凛烈なりしを知る可し。朝來の寒、東京十二月下旬の比の如し。午前七時半、通常列車に聯結して發す。此れより一百十三哩、大同府に達する迄、汽車は歩一歩登り路を駛る。路は概して羊河に傍ふ。土地曠漠、隨處に土城、土堡の廢殘せるもの多し。一望林樹、殆んど落葉し、而して樹身何れも東南に俯す、霜早く、風勁きを知る可し。西灣堡に至れば、左右漸く山を見る。停車場の南約五里、枳兒嶺あり、是れ直隷、山西の分堺也。此迄は燕にして、此れよ

西灣堡より陽高縣

りは雲中也。陽高縣にて午餐す、停車場の東南三里强に白登山あり、是れ漢高祖が、冒頓に困められたる地也。

滿林黄葉已無多

登登鐵路傍羊河。嶺上寒烟和雨過。十月雲中肅霜早。

滿林黄葉已無多。

九月とすれば、特に妙なれども、折角記實の作なれば、故らに十月として置く也。實の爲めに詞を害す、予が詩人たる能はざる所以、此に存す、呵々。

大同府に著す

斯くて午後三時、玉河に架したる、千八百呎の鐵橋を過ぐれば、已に大同府停車場也。玉河は金時代には、御河と稱す。桑乾河の上流の一也。

大正六年十月廿五日午前五時　大同停車場の特別汽車室内にて、窓外の風聲と、犬吠ゆる聲とを聞きつゝ。

（七〇）　大　同　府

古色蒼然の市街

大華嚴寺

大同府停車場には、知縣其他の官憲出迎、直ちに知縣の案内にて城内に赴く。停車場より城内迄は、二十四五町もある可し。先づ第一城門を入り、更らに曠郊を過ぎ、次ぎに第二の城門を入りて、市街となる。市街は清潔と云ふ能はざるも古色蒼然たり。此地は春秋時代には、北狄の居にして、戰國には趙に屬し、漢には平城縣として、鴈門太守の支配所たり。北魏拓跋氏此に都し、唐に於ては雲州と爲し、大同節度使を置き、遼、金に於ては、西京

府たり。今は大同縣にして、鴈門道の道尹の廳所あり。此邊石炭の產地にして、街頭何れも、一人一個以上擔ぐ能はざる大塊を見る。仔細に蹈査したらば、其他の鑛物も少からざる可し。

大華殿寺に詣す

予等は先づ有名なる大華嚴寺に詣す。數十級の石段を上りて行く。是れ遼の清寧八年の建立にして、大雄寶殿前、當時の石幢尙存す。殿堂宏麗、而して其の棟甍上の鴟尾天に朝し、遠く之を望む可し。明の洪武年間に改築し、同じく萬曆年間に修理し、更らに乾隆年間に再修せりと云ふ。而して此の高き殿堂の上に、數十百の鳩が、其脚に樂管を附し、翔る毎に一種微妙の音を、空中に發するの狀は、宛も天女の合奏を、空中に聽くと云ふも、浮辭にあらず。此れより九龍壁を見物し、道尹廳にて、知縣等の御馳走となれり。道尹は當時公用にて、管內巡視中と云ふ。知縣は三十八歲の壯价にて、日本留學生と云ふ。日本語は餘り達者ならざるも、日本の下情には、頗る通曉し、常陸山、太刀山、萬龍、榮龍、天プラ蕎麥、兩國の巽、獸店抔、口を衝いて出で、轉〻予等を驚嘆せしめたり。而して更に驚嘆せしめたるは、其の酒量也。

九龍壁の見物と知縣の御馳走

九龍壁

歸途には道廳より二人の兵士が、騎馬にて、先導し、道尹自用の支那馬車に騎りて、歸車せり。予等野人も、支那の田舍に來れば、斯く威張らせらるゝ也。所謂る無烏里の蝙蝠らん墨黑々と大書したる大提燈を、左右に一個づゝ携へ、憲兵隊長が池上本門寺の御會式にでも持ち出す可き、短冊形に赤く張りて、何や

無烏里の蝙蝠

は此事也、呵々。

大正六年十月廿五日午後六時　天色漸く明く、昨夜雨、今亦た風聲急也。大同停車場の特別汽車室に於て。

古石佛寺と湯山溫泉

（七一）　石佛三千倚峒隅

北京の北方十五哩、湯山溫泉旅館より一書拜呈。

十月廿五日早朝、汽車中に目を覺し、昨夜の豪雨を知る。八時五十分、駱駝轎にて古石佛寺へ

駱駝轎に乘りて、大同城の西三十餘支里の、雲崗山古石佛寺に向ふ。駱駝轎とは、馬の前後に轎を著けたるものにして、人に駕を擔はしむる代りに、馬に擔はせたるものと見れば可也。

雨後の朔風と遲々たる馬蹄

雨後の朔風、人を凍殺せんとす。見渡す限り、林際、堠邊、一樹として葉あるはなし。全くの枯枝也。而して泥深き三尺、馬蹄の遲々たる知る可し。曠原盡きて山徑となる。路は玉河の上流の一なる、武周川に副うて、幾回となく之を徒涉して行く。滿山皆石。而して石は概ね煤炭にして、炭

嵩山の奥に石佛寺を認む

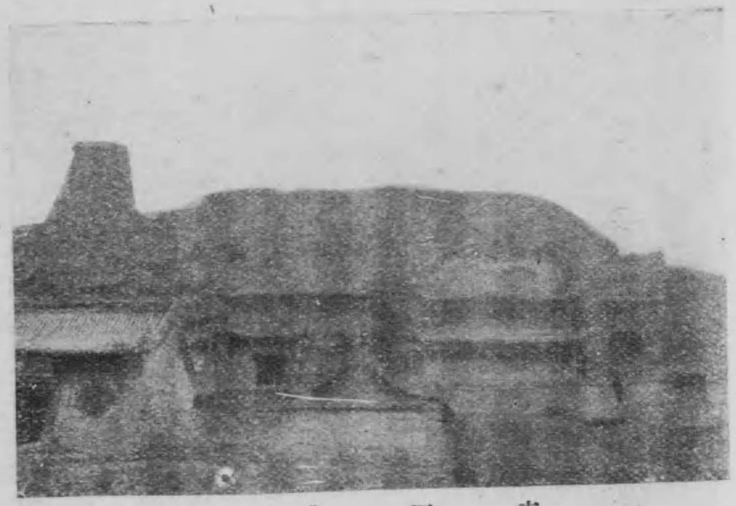
結構の雄麗と滿院の荒涼

石佛寺見物途中の駱駝轎

層の地上に露出する、隨處皆な是也。

山縈川轉。午後一時前漸く、碧甍朱閣の、嵩山の奥に聳ゆるを認む。間はずして古石佛寺たるを知る。是れ六朝拓跋魏時代、僧曇曜の開鑿、鐫彫したる者と云ふ。而して附近の洞穴、一として佛像を安置せざるなし。然も牧童は、其中に牛羊を飼養しつゝあるを見る。是れ所謂る佛牛一如歟。

寺は實に雄麗、宏妙なる結構也。七寶莊嚴の語も、之を形容する能はず。但だ滿院荒涼、間として人影なし。護衛兵や、隨行の憲兵隊長等と與に、勝手に寶壇内に入れば、稍く一個の寺男らしき者、何處よりか出で來れり。彼に問へば、拙者が此寺の僧と云ふ。果して然りや否やを知らず。兎も角も彼を先導として、石佛を見る。石佛高さ七十尺、奈良大佛と、伯仲の間と思はる。全身朱白にて塗抹したるが爲めに、聊か俗了したる嫌あるも、眞に傑作也。此れより寺樓に上る。第一層樓より第四層樓迄、各層毎に石佛の



巨大なる石佛

寺樓に上る

古石佛寺

肢體と相對し、第四層樓上に至りて、漸く石佛の眉目と相對す。架板、階段、半ば壞破し、一歩を轉ずる毎に、戰々兢々の思をなさしむ。頼ひに佛靈によりて無事を得たり。

大小幾百千の石佛

然も石佛は、此の一巨佛に止らず、其の周邊に、大は數十丈、小は數寸の石佛、幾千百の數を知らず。此邊皆な沙嵐なれば、彫鐫には亟めて便宜多きを知る。而して寺院の左右の大窟、小窟、悉く石佛ならざるはなし。或は石佛以外に、多寶塔抔の彫刻も見受けらる。其中には近作と覺ゆるものもあり。凡作と覺ゆるものもあり。されど此の如く、幾千百の石佛を置き去りにして、一僧の之を供養するなきは、無言不動の石佛とは申せ、如何にも笑止千萬也。拙作あり、曰く。

古石佛寺の石佛

荒涼寶塔泣昏烏

碧甍朱閣擁嵐區。石佛三千倚峒隅。欲向山僧談往事。荒涼寶塔泣昏烏。

歸途は下り阪なれば、幾許馬蹄も進みたり。されど阪を下りて曠原に至れば、眼前大同府の城壁を眺めつゝ、遲々として動かず。

雷公嶺上凍雲垂

大同城外朔風吹。雨後玉河涵石陂。羸馬蕭蕭鞭不動。

雷公嶺上凍雲垂。

雷公嶺は、此の近邊の最高峰の一也。道尹廳に五時半頃に著し、此處にて道尹代理、及び晉北鎮守使張樹幟、大同縣知事謝增華、其他諸氏と會食し、前夜同樣、會式的大提燈にて、停車場の特別汽車室迄送られたる

は、午後九時過ぎなりき。著する頃には、雨は再び降り出せり。

（七二）　大同より湯山

雨一變して雪

十月廿六日は、夜來の雨尚ほ止まず、寒殊に甚だし。杖一本にて雨と戰ひ、大同府を發する急行車に、乘り移る。此日朝鮮出發以來、始めて雨を侵すの必要に際す。午前七時に近き頃、汽車漸く發す。而して雨は一變して、雪となる。一望無際、滿天滿地、白皚々。予等廿四日、張家口より大同に赴く途中の停車場にて、汽車より二株の菊鉢の、纔かに苔みたるものを卸すを見、始めて當日の重陽たるに氣附けり。乃ち此日は舊曆にすれば、九月十一日也。而して大雪此の如し。古人の邊塞の詩、未だ必ずしも、誇張と云ふ可らざる也。

曠原無際雪紛々

一　北風浩浩捲寒雲。　朔漠山河斯裡分。　節過重陽纔二日。
　曠原無際雪紛紛。

沙河より湯山溫泉へ

陽高驛に至れば、雪片漸く大にして、雨之に加はる。張家口に至れば、全く雨、唯だ山上に雪を見るのみ。雨窓無聊、唯だ詩を思ふのみ。

八達嶺を越ゆれば、頓に嚴冬より晩秋に、立ち返りたる心地す。沙河にて下車、自動車に乘らんとすれば、運轉手文句を揑ねて動かず、予等車中に兀坐して、殆んど三十分を過ぐ。然も稍く說得の上、此の不動車を、他動車たらしめ、五時半に沙河を發し、白蛇村を經て、大湯山の麓を繞り、湯山溫泉ホテルに著したるは、已に六時半なりき。

大正六年十月廿七日午前八時　湯山溫泉ホテルの一室にて認む

（七三）　湯山溫泉の今昔

曾遊に比較して變化の較著に驚く

今朝起き出で、溫泉ホテルの周圍を一週し、鞄より『七十八日遊記』を取り出し、曾遊の當時と比較し、實に其の變化の、較著なるに驚けり。當

時荒廢したる康熙帝離宮の建物は、殆んど皆無也、其の勅額さへも影だになし。當時荒廢の中心點たりし大理石甃池に、全湧噴出したる湯泉は、宛も予が寢室の後、僅かに十歩の外にあり。十二年前の當時は、此邊にホテル出來し、自から西洋寢臺の上に、安眠せん抔とは、夢にも幻にも思はざりし也。而して當時の滿開紅蓮は、枯荷となり、離宮の礎石は、今やホテルの經營に、或は壁材に、或は橋材に應用せられ、樹上の鳥聲は、地上の

湯山溫泉ホテル

依然たる庭園と晩秋の景致

石工の石を削る音と、相和して、曉靜を破りつゝあり。

但だ荒れ果てたる庭苑は、概して依然たり。定めて江南より移植したるならむ、此處には珍らしくも小竹あり。又た滿庭の槭樹、半ば落ち、半ば濃黃、淡紅の葉を剩し、翠柏、老檜と交錯して、玆に晩秋の景致を剩しつゝあり。

曹汝霖氏等の經營

此の溫泉ホテルは、交通部長曹汝霖氏等の、經營する所にして、十二年前來遊したる予さへも、其の變化に驚きたれば、地下の康熙帝にして知るあらば、定めて意外の感を做さむ。最早曹汝霖氏等の一行、北京より來著の時間近きたれば、閑話は此に休題すと云爾。

大正六年十月廿七日午前十時半

（七四）　山中無曆日

一日繰違への發見

十月廿七日の午後は、湯山溫泉より北京に還る可く、既に其の用意を

山中無暦日の實驗者

湯山温泉ホテル後庭より大湯山を望む

倣しつゝありしに、北京の曹汝霖氏より、此れより其地に赴くに付き、是非今一夕宿泊あれとの電話あり。予等は日曜には、北京に還る豫定なりと云へば、本日は土曜也、明日こそ日曜なれば、明日豫定を實行せられて、然る可しと云ふ。扨は不思議也、彼是日取を繰り算したるに、漸くにして予等は、一日を繰り違へたるとを發見せり。予等は大同より土曜夕、湯山に著すと、曹氏に發電しつゝ、其實は金曜夕に著したる也。自から山中無暦日の實驗者となりしは、慚惶の至なれども、事實なれば致方なし。軈て曹氏は、坂西少將、及び夫人と、頃ろ北京に來りつゝある其の尊翁とを伴ひ來り、先著の前日本公使陸宗輿氏、及び夫人等と、一同晩餐の卓に就き、坂西少將は、予等が一日を取り違へたるは、一日の生命の贏得なりとて、之が爲めに祝杯を擧げ、一同之に和せり。予一人の誤算ならば、老耄とも云はむ、山崎、玉生兩氏迄が、同樣なりしを見れば、全く支那の奥に蹈み入りて、呑氣者と化したる爲めならむ。されど此の誤算は、予等に取りては、寧ろ好都合なりき。入浴六回、東京より持參したる垢迄も、洗ひ盡したれば也。廿七夕は、舊暦九月十四日にして、數日來の陰雲霽れ、一天碧澄、恰も殆んど後の望月を、此の由緒ある温泉場なる、直隷の大平原に於て見るを得たれば也。

一天澄碧後の望月

大正六年十月廿八日午前五時　湯山温泉に於て

（七五）　小湯山大湯山

小湯山に上る

上記の如く、出立す可き午後は、尚ほ當所に滯在することゝなりたれば、予等は其の數時間を利用し、先づ小湯山に上れり。周圍半哩、高さ三十呎の小山にして、其上に關帝廟あり。從來は此地の溫泉に來る外國人を宿泊せしめたる由なれども、今は乞食の住居たり。

大湯山絶頂の眺望

轉じて大湯山に向ふ。大湯山は、絶頂三峰より成る。而して其の中腹に一廟あり、更らに絶頂の一端に娘々廟あり、其の中央に龍王廟あり。全山皆石、殆んど一木なし。唯だ廟庭に、槐樹、柏樹、數株を見るのみ。周圍二哩、高さ二百呎の小山なれども、孤峰平野に直起し、其の眺望は、實に無類也。乃ち明十三陵の天壽山や、昌平州、沙河鎮等の墟落や、北京の近郊や、悉く双眸の中に鍾る。收穫後の一哩以上もある、大なる畝、隨處に楡柳の簇生せる黃葉の村、近くは牛羊の遊牧する、家鴨の群集する、眞に

人間の無殘か神樣の無能か

深泥滿靴

大湯山上より直隷省の平野を望む

詩趣饒し。

廟は何れも、康熙年間の勅立なれども、殆んど荒廢して、其の棟甍さへ、完きもの少し。奪ひ去らるゝもの丈は、殆んど奪ひ盡し、唯だ巨鐘と、康熙の年號を鑄り附けたる、大なる鐵の香爐と、神體とを剩せるのみ。人間の無殘なるが爲め耶、神樣の無能なるが爲め耶。

當日は時に小雨ありしも、傘を用ふる程にあらざりき。但だ前日來の雨にて、山徑はそれ程にあらざるも、村落の間にある、僅か數町の

道路は、深泥に混ずるに、人糞、馬糞、牛糞、豚糞を以てし、而して雨溜に和するに、人尿を以てし、殆んど眼を開いては、脚を著け難き狀態にてありき。

世界第一の屎尿不始末國

支那人は多くの點に於て、最も開化せる人種の一なるも、尿屎の始末の惡きは、恐らく世界第一ならむ。如何なる大家廣厦も、其の壁隅の一角は、概して屎尿堆を做しつゝあり。如何なる道路も、小心翼々たらざれば、乍ち屎尿を踏むの虞あり。過日大同道尹廳に於て、便所の案内を請うたるに、侍者は予等を誘うて、廳側の後庭に赴けり。乃ち勝手に放尿せよとの事也。予等は少からず恐縮せり。甚だ汚き沙汰なれども、話の序に記し置く也。讀者鼻を掩うて可也。

大正六年十月廿八日午前五時半　湯山溫泉の一室に於て

京綏鐵道

（七六）四百餘哩の往復

久振りに日本食の馳走

十月廿八日正午、湯山より北京に還る。同夜は大谷光瑞師と與に、林公使の私宴に招かれ、便服の儘、久し振りに日本食の馳走に預り。政治を拔にしたる書畫、骨董、人物等、あらゆる興味ある談話に、打ち興じつゝ、大谷師と相與に、辭して公使館の門を出づれば、陰曆九月十五夜の滿月は、高く半天に掛れり。『長安一片月、萬戸擣衣聲。』と、古人の詠じたる好句も、今は眼前に遭遇しつゝあり。中秋の明月は、滿洲の長春にて眺め、後の望月は、幽燕の故都にて眺む。知らず東坡後赤壁賦の、所謂る十月の望月は、何處にて眺む可き乎。

陰曆九月十五夜の滿月

愉快なりし一週間

予等の京綏鐵道旅行は、約一週間を費せり。廿二日に出で、廿八日に

還る。此の日子は、予等に取りて、恐らくは今回の旅行中、尤も愉快にして、且つ有益なる一たりしならむ。

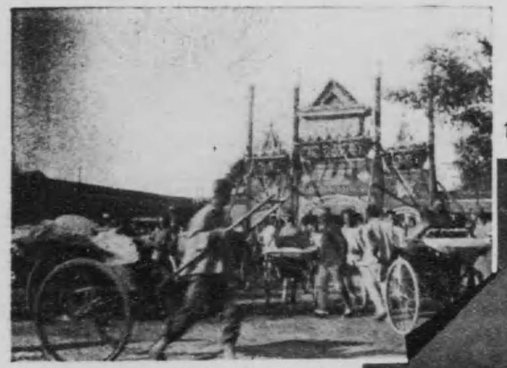
京綏鐵道は、北京より張家口、大同を經て、綏遠城に達するものにして、予等は其の既成線路、四百餘哩を往復せり。此の線路は、山西の煤炭地を通過し、蒙古の羊毛や、皮革や、將た農産物や、其の物資勝げて數ふ可らざるものあり。其の歸化城に達するの日や、其の利知る可し。而して若し此の鐵道を延長して、北京より渤海に直通せしめん乎。其利更らに大なるものあらむ。

四百餘哩の光景と二十八字詩

朔風白雪雁門邊。　凍雨寒雲八達巔。　今日黄榆丹棫裡。
一泓明鏡浴温泉。

四百餘哩の光景、此の二十八字にて推察を乞ふ。

大正六年十月廿九日午後五時



北京　萬壽山耶律楚材像

北京　中央公園に開催の天津水害救助金募集の抽籤會場

北京中央公園の格言塔

北京　萬壽山昆明湖扁舟上の大谷光瑞師(左)と蘇峰學人(右)

萬壽山に遊ぶ

（七七）　大谷光瑞師と同行

大谷師の萬壽山案内

十月廿九日は、如何なる快日ぞや。昨夜大谷師は、予等が爲めに、退京の一日を延期し、萬壽山に案内せんとを誘はれたり。渡りに舟也、予等の欣諾は勿論也。廿九日午前九時過ぎ、北京飯店を發す。同行は大谷師の一行と、予等とのみ。自動車二輛に分乘して行く。

此の日、昨夜來の快晴に、更らに一層の澄清を加ふ。連日北京の陰雲、豪雨、疾風に比して、殆んど別乾坤の感あり。

先づ耶律楚材の墓に詣す

西直門を出づれば、御道は坦々として砥の如く、道を挾むの楊柳は、半翠半黄に、面を掠むるの朝風は、人をして心氣爽然たらしむ。斯くて十八支里を過ぎ、萬壽山に著し、先づ耶律楚材の墓に詣す。墓は西太后時

成吉斯汗に於ける諸葛孔明

代に使用したる、電燈所の裡に封じ込まれ、今は乾隆の御碑のみ、荒草茫々の中に立てり。碑を去る數歩、彼の塑像と、其の安棺の封土とは、何れも蛛網に十重、百重に、取り捲かれたる家根下にあり。恐らくは此の如き場所に、此の如き人の、墳墓の存在するを知る者も少かる可く、縱令知りたりとて、之を顧る者も少かる可し。

萬壽山麓耶律楚材碑碑に於ける大谷光瑞師(右)と蘇峰學人(左)

然も耶律楚材は、成吉斯汗の諸葛孔明也。學問、事功を併せ兼ねたる全材也。支那に於ては管仲以後の政治家と云ふも、過言ならざる可し。吾人は今日の中華民國に、斯人を見出さゞるを悲しむ。

頤和園の風景と佛光閣上の眺望

此より西太后の、北洋海軍費を流用して經營したる、頤和園に遊ぶ。園は萬壽山に倚り、昆明湖に臨む。元來此邊は金、元、以來の遊園にして、乾隆帝に至り、之を築造し、玉泉山の水を湛へて、之を昆明池と稱し、其の湖堤に楊柳を植ゑ、大理石橋を以て、小嶼と連絡し、其の風景恰も北方の西湖と稱す可きに似たり。而して山腹に、西藏の法王宮殿に擬したる、佛光閣の黄甍は、巍然として聳え、閣上の石欄より眺望すれば、人をして殆んど詩化し、畫化し、仙化し、佛化し去らんとする也。

天厨の美味も此に過ぎず

此れより扁舟に乘じて、石橋の下を過ぎ、西湖の孤山に擬したる小嶼を繞り。大理石舟の上に架したる樓上に於て、用意の辨當を喫せり。冷肉、冷水、パンにバタなるも、天厨の美味も此に過ぎざりし也。斯くて萬壽山の裏面を徒歩し、其の山中の秋色を賞し、午後三時歸途に就けり。

中央公園に群集して見物

萬壽山昆明湖上より佛光閣を望む

自動車中央公園の前に至れば、自動車、馬車、人力車、塡充して、殆ど行く可らず。乃ち知る此日は、中央公園に於て、天津水害救濟の爲めに、彩票を發し、其の景品を此中に陳列し、且つ餘興等の催あるが爲めなるとを。此に於て大谷師と與に、此中に入りて、其群集を見物せり。何れも北京中流以上の社會にして、女性は其の過半を占めたり。景品には、諸品山積せり。法帖もあれば、陶器もあり、絹綢もあれば、鹽もあり。書畫もあれば、世帶道具もあ

大谷師の好意を感謝し併せて前途を祝福す

り。何處の女性も、慾は少からざるものと覺えたり。見物婦人は、景品よりも多かりし也。大谷師は、今夕を以て、北京を發せんとす。予は大谷師の、此の一日の滯在を感謝せざるを得ず。而して予と、大谷師と、兩び相見るの期も、何の日か未だ知る可らず。況んや此遊を再びするをや。大谷師は其の自ら使用しつゝある、南洋に於けるアラビヤ人の製した る、黑檀の杖を、記念として予に貽られたり。其の好意、眞に言語に餘れり。予は唯だ師の前途を祝福して、之に酬いんのみ。

大正六年十月廿九日午後六時半

北京を去る

（七八）　北京より最後の一書

今頃京漢線の車中にある可き予は、北京より最後の一書を呈す。

滯在二週間幷州の感あり

昨夜十時乘込、今曉二時、正陽門外發車の豫定なりしに、鐵道の方にて出し拔けに、本日午前九時發車に改めたれば、前夜より乘り込む必要もなく、便宜もなく、此に於て更らに行李を袪らき、北京飯店に一宿せり。滯在十月十三日夜より三十一日朝に至る。中間大同旅行を除くも、殆んど二週間、豈に幷州の感なきを得ん哉。

北京は面白き所

如何に考へても、北京は面白き所也。現在の政治は別として、其他各般の方面に於ても、最も面白き所也。一日飽かず、一月飽かず、一年、十年、恐らくは飽くなけむ。但だ予等北京に飽かざるも、北京予等に飽くの虞

あり。去らざる可らざる所以也。

千客萬來の北京

今や北京は、千客萬來也。先客が餘りに腰を据ゑては、後客が迷惑也、客よりも主人側が迷惑也。昨日は最後の一日なれば、午前九時頃より午後三時頃迄、琉璃廠の古書肆、骨董肆を、殆ど戸別訪問せり。此熱心あらば、投票の二三百は、予の不肖を以てしても、或は得らる可き歟。此の如く長時間を費し、果して何の獲る所ありしぞ。品は多けれども、案外に欲しきものはなし。偶〻あれば、法外の値を吹掛けられ、辟易三千里也。乃ち法外ならざるも、豫算案通過容易ならず、況んや法外なるをや。而して偶〻手に合ふ可き品物も、其の値を議するの時間に、手間取りて容易に落著せず。但だ聊か同好に誇る可きは、『四庫全書簡明目錄』中の別集部の袖珍六冊也。古色蒼然たる錦綾の帙に、每冊金線を以て綴り、標題には隸字にて、書名を記し、開卷『乾隆御覽之寶』の印あり、卷末『古稀天子之寶』の印あり。而して雪白の開花紙に、謹嚴なる正楷にて

琉璃廠の戸別訪問

聊か誇る可き物

精抄す。恐らくは乾隆帝の座右に侍したる手澤本ならむ。但だ其の内容に至りては、何等特殊の價値なし、徒らに快心、洞目の具に過ぎざるのみ。而して予の所獲の、六冊以外の百餘冊は、今何くに存在する乎、何人の所有なる乎。若し其の方法あらば、合璧完珠、敢て愛しむ所にあらざる也。

大正六年十月盡日午前七時　北京客舍に於て

北京より漢口

（七九）京漢鐵道（一）

京漢鐵道修理全通の第一先乘客

漢口より拜啓。予等は十月卅一日午前九時四十五分を以て、北京正陽門外を發し、七百五十三哩の長途を、翌十一月一日午後三時四十分、即ち約三十時間にて、漢口大智門に到著せり。北京に於ける一夕の滯在は、却て予等をして、途中徒歩、渡船に乘るの厄を免れしめたり。即ち京漢鐵道修理全通の、第一先登乘客は、予等たりしを以て也。實は十二年前も、水害の爲めに、此の線路を通過するを得せず。せめて今度は萬障を排してもと、決心したれども、九月十五日東京出立前より、大破損の報に接し、爾來工事の都合を問ひ質す毎に、容易に復舊せざる可しとの答に接し、頗る鬼胎を懷きたるに。今や最後の難場たりし、新樂縣の

沙河の鐵橋も、極めて不完全ながらも、汽車の通行に差支なく、予等は手に冷汗を握りつゝ、首尾能く通過して、吐息せり。

『中原』の眞意義を會得

京漢線は、支那の中原たる、燕、趙、魏を貫き、楚に達するものにして、沃野千里、一望無際、墜路(とんねる)としては、唯だ僅かに信陽に於て一個あるのみ。但だ其の架橋工事に至りては、黄河の二哩に亙る大鐵橋以外、幾許の大小鐵橋あり。而して洪水氾濫する毎に、必らず損害を被る。予は實に京漢鐵道を通過して、始めて支那に於ける『中原』なる文字の、眞意義を會得したる感あり。

(八十) 京漢鐵道(二)

特に謝す可き兩君

十月卅一日は、申す迄もなく、吾皇の天長祝節也。北京に於ても、理想的の祝節日和なりき。見送りを忝うしたる、日支の諸君に謝しつゝ車に上る。特に謝す可きは、北京滯在中、始終一貫、予等の爲めに面倒を見られたる松村太郎君、脇川文近君也。

吟情若水出燕京

氣霽れ日和かにして、申分なき小春の天、車窓中ぼか〳〵として、殆んど美睡を想ふばかり也。汽車涿州を過ぐ、是れ劉玄德の故郷にして、今尚ほ樓桑村あり。予は纔かに作詩に耽りて、睡魔を驅除せり。

西山紫翠映金城。氷雪未臻霜菊清。正想江南秋色好。
吟情若水出燕京。

老楊如蓋壠丘間

金城とは、紫禁城の事也。金臺の名あるを以て、斯く稱する也。

秋原渺渺旅愁閒。盡日東南不見山。大耳王孫產何處。
老楊如蓋壠丘間。

三國志を讀みたる人は、蚤くに熟知の事ならむ。贅解を附せず。特に東南の二字を添へたるは、偶〻西北には、雲烟縹渺の間に、大行の山脈隱見すれば也。

汽車中より水害の一瞥

汽車中より一瞥しても、水害の過甚思ひやらる。水害は日本專有の厄

災にあらざる也。丈餘の高粱圃が、新川若くは新堀となりたるあり。巨大なる橋臺が、伊太利ピザの高塔の如く、傾斜するあり。鐵橋の桁若くは勾欄が、遙かの下流の沙中に、半身を沒するあり。新樂縣に於ける沙河は勿論、光武帝が麥飯を喫したりと稱する、滹沱河畔の如き、其の被害の大、數個月を經過したる今日、尙ほ目も當てられぬ情態也。石家莊を過ぐれば、氣候更に融和。一詩あり。

北燕秋老客裘寒。南望中原千里寬。不用黃粱炊裡睡。
驢輪載夢過邯鄲。

驢輪載夢過邯鄲

是れ實に實況也。予は邯鄲を夢中に過せり。邯鄲尙ほ可也、されど黃河の大鐵橋をも、同樣なりしは、聊か申譯なしと云ふ可し。沿道の停車場にて、湖南討伐軍の糧餉馬匹、其他の物資を滿載したる貨車に遭著し、或は兵士の三々伍々往來するを見る。北京政府の多事、想ふ可し。

（八一）　京漢鐵道（三）

宛是一幅故園圖

十一月一日、目を醒せば秋雨瀟々たり。汽車郾城縣停車場に著したるは、午前六時四十分也。此地は楚の召陵邑也。十時信陽驛に至る。此の附近より平原盡きて、阜陵となり、山陂となる。隨處竹林を見、松林を見、紅葉を見、細かに區分せられたる水田を見、地勢によりて重疊したる段段畑を見、白沙清流を見、山村水郭を見る。宛も是れ一幅故園の圖也。但だ竹林の烟雨に濕うて、深翠滴るの色は、日本にある總ての竹林を、擧げ來るも、恐くは此に敵する能はざる可し。予は此の竹林に對して、『萬竿如束翠沈沈』の詩意を諒會したり。但だ百穗書伯と與に、之を賞する能はざりしを憾む。

道入信陽看似畫

平原蹈盡到山根。秋雨蕭條紅葉繁。道入信陽看似畫。
疎松密竹水雲村。

やがて汽車は、揚子江の流域に入る。平遠の山水、秋雨孤蓬、小運河に泊する客舟あり。水牛の收穫後の田に耕すあり。四手網の柳蔭に繫かり卸さるゝあり。何れの木も、未だ一葉の黄を見ず、晩稻は青々として、尙ほ田にあり。正に是れ江南の秋景にして、汽車中の予等も亦た、恐らく書中の人ならむ。

（八二）　宗演老漢

宗演老漢一行と相會

汽車の漢口大智門に著するや、十二年前の舊東道たりし、橋三郎君を首として、舊知新知の諸友來り迎ふ。先づホテルに行李を卸し、直ちに正金銀行支店樓上に赴き、宗演老漢の一行と相會し、老漢の講話を聽き、支店長水津君夫婦の厚意にて、老漢と會食し、老漢の行を送りて、襄陽丸に到れり。

老漢の意氣偉壯也

老漢は十月上旬、大連一別以來、青島に赴き、泰山に登り、曲阜に孔子の墓に詣し、鄭州より洛陽に向ひ、白馬寺に漢代佛敎渡來の跡を訪ひ、少林寺に初祖達磨の蹤を尋ね、龍門に六朝時代佛敎興隆の蹟を探り、南下此地に到り、此より廬山に登り、普陀山に抵らんとすと云ふ。其の意氣の壯想ふ可し。而して到處通行稅を徵せられ、講演、揮毫、應接に遑あらず。予が客を謝し、事に遠かり、唯だ隨意隨處に行止するに比し、其の勤怠、同日の論にあらず。而して予と、老漢との因緣、亦た奇ならずとせず。八月一たび逗子觀瀾亭に於て相見、九月京城に於て相見、十月大連に於て相見、十一月漢口に於て相見る。知らず今後相見る、上海なる乎、東京なる乎、湘南なる乎。

今後相見るは何處乎

大正六年十一月二日午前七時半　漢口ターミナス・ホテルの第十號室に於て

漢口

（八三）漢口の今昔

多望なる日本租界の前途

漢口は前遊に比して、今昔の感あり。當時一千人の日本人は、今や二千人となり、當時乞食の巣窟たりし日本租界は、今や堅牢なる護岸工事出で來り、支那全土中に於ける日本領事館中、恐らく第一――唯一と云はざる迄も――の建築聳え。而して三井、三菱、正金、日清汽船、臺灣銀行、住友、鈴木、其他の大賈、何れも舊に倍して、英、露、佛、獨各租界の中に、龍蟠虎踞せり。瀬川總領事の説明によれば、獨逸にては、各租界に分散したる獨商を、獨租界に衆合せしめたるも、日本にては、寧ろ之を各租界に分散したるに一任し。日本租界は、住宅、若しくは社交的便宜に供しつゝありと云ふ。併し他日粵漢鐵道と、京漢鐵道との連絡出で來る曉には

漢口は南北衝突の緩衝地帶

濁流混々眞に壯觀

漢口水戎克

恐くは日本租界は、漢口に於ける最重最要の地點たらむ。日本租界の前途、頗る多望と云ふ可きに似たり。

本年の夏は、大江の水四十四五尺に上り、獨租界の如きは、裳をかゝげて涉らざる可らざる程なりしと云ふ。即今は江水落ちて、尚ほ三十尺弱なる可し。濁流混々、眞に壯觀也。

予等は瀬川總領事の案内にて、領事館絶頂の露臺に上り、武昌、漢口を眼下に見、所謂る三楚の形勝の

一斑を、手に挹るを得たるかと思へり。漢口が九省の會と稱して、四達八通の咽喉に當り、支那に於ける經濟上重要の地を占むるも、決して偶然にあらず。而して今日に於て、湖北は實に南北衝突の緩衝地帶也。督軍王占元の持重して動かざるは、或は洞ヶ峠の嗤を招くの、虞なきにあらざるも、其の長江一帶の平和を、維持するの功と勞とは、沒す可らず。乃ち政治上に於ても、亦た要衝と云はざるを得ざる也。

支那武人中傑出の王督軍

（八四）　王　督　軍

予等は瀨川總領事の案內にて、住友家の湯川寬吉君一行と與に、武昌に赴き、湖北督軍兼省長王占元氏の午餐會に列せり。

騎兵先導、馬車出迎、轅門に入れば、兵士捧銃、軍樂吹奏、隨分仰山也。王占元氏は山東出身にして、自から一介の武弁と稱するも、胸中の機略は、其の言語應對の間にも、發露せらる。面目黎黑、容顏快活の偉丈夫にして、質朴なる武人氣質を示し、人に對して極めて良好の印象を與ふ。此行幾許の支那武人と會見したるも、王督軍の如きは、其の傑出の一ならむ。蓋し彼が自から三楚の重鎭を以て任じ、長江一帶の平和の樞機を握り、敢て輕擧妄動せず、徐ろに天下大勢の趨く所を待ちつゝあるの狀は、機微の間に、看取せらるれば也。

湖北督軍王占元氏肖像

王氏の料理趣と飲量

氏の料理通は、有名のものにして、其の精饌は、人をして饜かしむるに

餘りあり。但だ病餘の予は、其の好意に酬ゆるを、戒めざる可らざるを悔ゆるのみ。而して氏の飲量に至りては、更に驚く可し。予は瀬川總領事が、予が爲めに、始終數時間に渡りて、通譯の勞を取られたると、特に予に代りて、乾杯の役を繰り返されたるとを、謝せざる可らず。

兩人の責任亦た大

明治三十三年、團匪事件あるや、南京に劉坤一あり、武昌に張之洞あり爲めに長江一帶の平和は、維持せられたり。今や武昌に王占元あり、南京に李純あり。兩人の責任、亦た大ならずとせず。

（八五）　黄鶴樓

附近の殺風景

歸途黄鶴樓を訪ふ。本日は昨雨にて洗ひ清められ、珍しく清潔なりとの沙汰なれども、臭氣紛々、殆ど靴を著くるに地なからんとす。先づ元代の大理石喇嘛塔を見、黄鶴樓に上る。此の附近、乞食にあらざれば人相見、寫眞屋の巣窟にして、殺風景極れり。されど如何なる人力も、天然の形勝を滅絶する能はず。其の眺望は、實に絶佳也。

黄鶴樓

第一革命の際は、漢陽の大別山頭に砲列を設け、漢口を攻撃したりと云ふ。今は南方蜂起の際にて、此地も戒嚴令を施し、大別山には登臨を許さずと云ふ。然も大江を隔てて相對し、其の面目、約略辨ず可し。詩あり。

眺望は實に絶佳

革命功成群小雄

革命功成群小雄。　西南殺氣滿長空。　登臨欲問禹王業。
秖有江流日夜東。

武昌の蛇山、漢陽の龜山――即ち大別山――を中斷して、大江を疏通したる神禹の功は、及ばずもがな。せめて南北一統の人物にても出で來らば、四萬々の生靈も、若干其の惠に浴す可きに、議論商賣、戰爭商賣にて、其日暮らしを事とする群小政治家には、誰しも閉口ならむ。

元代の大理石喇嘛塔

大正六年十一月三日午前七時　漢口に於て

（八六）　漢口の兵營

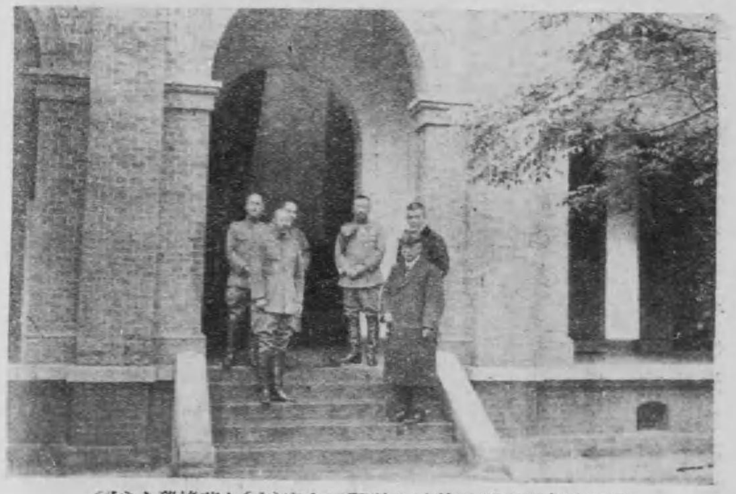
駐屯軍兵營を訪問

揚子江を下りつゝある汽船大福丸客室中より啓上。

昨年――大正五年――の十一月三日は、朝鮮に於て、往復四十里の驪州行をなし、本年の十一月三日は、漢口に於て見物をなす。然り十一月三日は、可なり多忙の日なりき。午前には橋三郎君の案内にて、我が駐屯軍兵營を訪問せり。兵營はレース倶樂部に隣接して、二萬幾千坪を占むる地面の上に、赤煉瓦にて建築せられ、曾て旗竿と稱せられたる、無線電信柱は、高く其中に聳立せり。司令官々舍の庭前には、樹木欝葱たり、而して芭蕉樹の如き、今尚ほ青々たり。數年前の荒蕪したる畑地が、此の如く急激の變化を遂げんとは、我も人も前知せざりし也。現時の司令官は神頭少將にして、其の經營は、與倉司令官時代に成りたるもの多きが如し。營口と云ひ、漢口と云ひ、與倉少將の手腕は、歴々徴す可し。

神頭現司令官と與倉前司令官

駐屯軍は長江平和の維持者



漢口駐屯軍兵營に於ける砲隊司令官（左）と騎兵學入學（右）

或は其過ぎたるの譏はあらむ、未だ及ばざる非難はあらざる也。

漢口に吾兵の駐屯する事は、世間多少の議論あり。一方には、萬一の際に役に立つ程の兵數もなく、僅かに六七百の兵士を派遣し、その爲に痛くもなき腹を探られ、歐米人に、排日鼓吹の口實を得せしむるは、愚の骨頂也と云ふ者あり。されど他方には、此の軍隊の爲めに長江の平和の維持せらるゝは、單り在留本邦人之を認むるのみならず、外國人、皆な然り。否な支那人

剛健なる壯漢と周邊の清潔

と雖も、亦た然り。現に一たび事變の徵候ある毎に、軍隊附近の陋屋に、支那人の密集し來るは、其の保護に浴せんとするに他ならず。精神的に、物質的に、其の効力の多大、疑を容れずと云ふ者あり。

軍艦と、兵營とに來りて、最も氣持の善きは、剛健なる壯漢に接すると、周邊の清潔と也。特に支那の如き地方に於ては、清潔が最も、人の心目を怡ばしむるに足る也。軍隊の衞生も、市街地より此處に移轉したるが爲めに、良好なりとは、神頭司令官の語る所也。

漢口唯一の遊園地

氣持善き倶樂部の午餐會

（八七）　レース倶樂部

レース倶樂部は、專ら英人の經營する所にして、日本人も會員たる者少からず。但だ支那人は入會せしめざるのみならず、入場さへも禁じつゝあり。蓋し漢口に於る唯一の遊園場にして、且つ娛樂機關たり。

予等は倶樂部專有道路たる桐、杉、篝（おらたなす）、掛樹、楊樹等の並木生ひ茂れる、坦

坦たる大道に馬車を驅り、倶樂部に到る。庭上砌邊、悉く菊花の鉢ならざるはなし。室に入り暖爐に對し、茶を喫す。何となく氣持善き倶樂部也。英人氣質の美所、長所は、才かに此の倶樂部の經營に於ても、發揮せらる。やがて漢口に於ける中年、壯年の諸名士來會し、予等の爲めに午餐會を開かれたり。料理も吾等の旅館たるターミナスホテルの、月並的に比しては、同日の論にあらず。而して來會者諸君中、特に我が鄉友の多かりしは、最も快心の一と云はざるを得ず。

漢口の遊を了る

此れより鄉友寶妻壽作君に誘はれ、小蒸汽にて、長江を溯り、晴川閣下に赴き、舵を轉じて、漢水の長江に注ぐ口に到り、漢水を溯りて、一目千艘と稱する支那戎克の重圍中を縫ひ行き、更らに英租界の支那街に接する地點に上陸して、支那街を見物し、漢口にて漁れたる鯰の巨大なるに一驚を喫し、支那苦力の叫喚に、一興を催ほし、臺灣銀行支店の新築に、前途の多望を祝福し、玆に愈〻漢口の遊を了れり。

（八八）瀨川總領事

瀨川總領事との宿緣

予は瀨川總領事と、宿緣眞に淺からざるを確めたり。明治三十年六月、桑港に於て相見、明治三十九年六月、營口に於て相見、今回亦た漢口に於て相見る。而して相見る毎に、予等の爲に多大の便宜を提供せられたるは、感謝せざる可らざる所也。今回の如き、特に然りと爲

漢口總領事館に於ける瀨川總領事（左）と蘇峰學人（右）

す。予等は一切の行李を、汽船に積込み、旅店の勘定を濟ませ、總領事夫婦の晩餐の饗應に預り、總領事館より直ちに乘船せり。

晩餐の同席者と瀬川氏

晩餐の同席には、伏見、隅田の兩艦長あり、前者上海より來著、後者上海に去るを以て也。瀬川君の如きは、支那語に精通し、支那の習俗に練熟し、且つ支那人を諒解し、支那人に對して同情あり。其の誠愨、懇摯なる、巧詐の支那人も、君を欺くに忍びざらむ。吾人は政府が、其の適材を適所に用ひたるを嘉みし、總て支那に於ける官憲をして、此の好例に倣はしめんとを望む。

大正六年十一月四日午前六時　長江汽船大福丸客室電燈下に於て

九江より南昌

（八九）　下江して九江、南昌

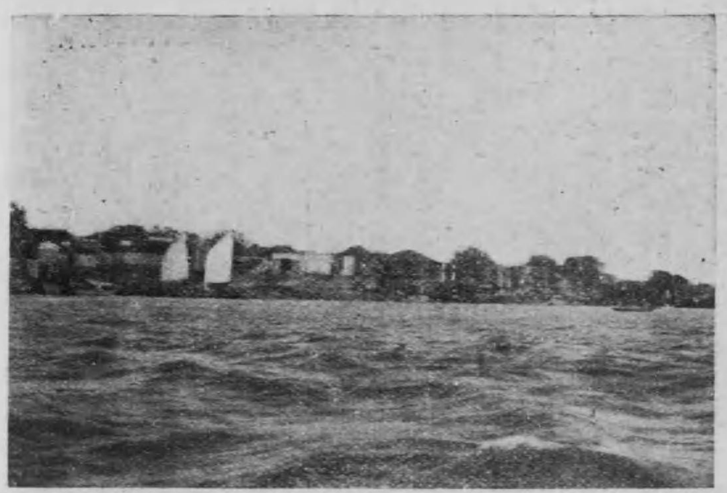
江西省の首府、南昌の支那客棧怡園の室中より啓上。

兩岸の秋色と詩興

扨も十一月四日、起て船窓を揭ぐれば、汽船は已に武穴に近きつゝあり。天色曇晴相半ばし、理想的と云ふ能はざるも、兩岸の秋色は、甲板上の籐椅子に坐して掬す可し。曾遊の白帆、岸柳の上を駛りし時に比すれば、江の幅員聊か減じたるに似たるも、何時もながらの混々たる長江、只だ此れのみにても、詩興を挑發するには、十二分也。況や清霜漸く江樹を染め、秋氣江村に滿つるに於てをや。

長江中の一大要港

午前九時、朝餐未だ了らざるに、九江に著す。九江は白樂天の琵琶行を以て名ある、潯陽江に枕し、明太祖が陳友諒と激戰して、大明の帝業を



南昌の臺水

開きたる鄱陽湖を控へ、實に長江中の一大要港たり。河西領事を始め、高比良日清汽船出張所長、右近臺灣銀行支店支配人、其他の諸氏、船まで出迎はれ。諸氏の好意にて、直ちに準備を整へ、停車場に赴き、十時半發にて南昌に向へり。吾等三人の外、南潯鐵道の田中啓次郎君、日清汽船の笹間博君、領事館書記生白井康君、外に田中君及び吾等の支那從者各一人、都合八人也。此が爲めに臨時頭等車聯結せられたり。

宛も東京四月下旬の氣候

天氣模樣尙未だ怪しき爲め、雨衣、晴衣、銘々不同也。但だ予等は杖一本にてやり通せり。有名なる廬山は、纔に烟雲模糊中に看過せり。されど沿道の風色、澤沼には鳧雁の群飛するあり、山陂には翠松あり、岡陵には柿や楓やの紅葉あり、畑には粟穗尙ほ未だ收め盡さず、田には晩稻幾分を留めあり。而してやがて天漸く霽れ、日光車窓を射り、宛も東京四月下旬の氣候となり、一行過半、何れも睡魔に魅せられたり。

小舟にて贛水を渡る

南昌の對岸に著したるは、午後四時過ぎにして、此より小舟に帆を揚げ、贛水を渡る。贛水は江西省の大動脈にして、運輸の便、尤も多し。是亦た濁流也、但だ長江程に濃濁ならざるのみ。

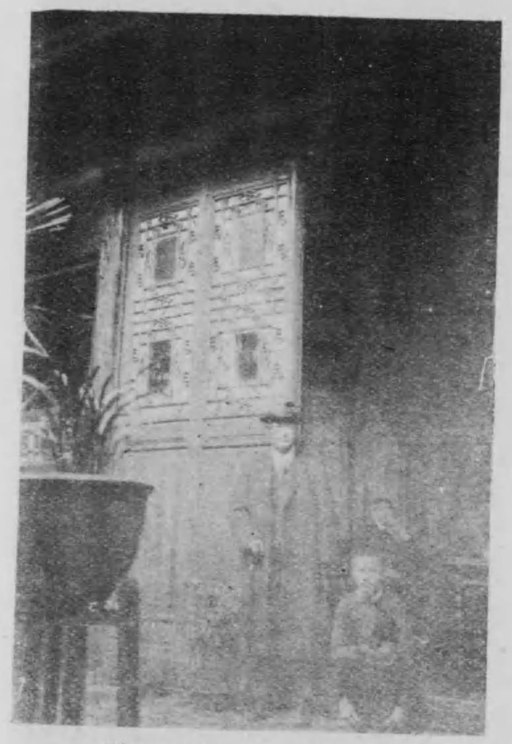
便所の閉却には閉口

吾等は南昌に入りて、客棧怡園に行李を卸せり。支那旅館としては、寧ろ望外に整頓せり。電燈あり、寢臺あり、但だ蒲團なく、便所らしき便所なきに閉口せり。蒲團は携帶の毛布にて代用す可し、然も便所に至りては、不潔を辛抱するの他なし。支那人程、口腹の慾を充たすに腐心す

る者は、世界に罕なり。然るに單り便所を閑却するは何ぞや、眞に解す可らざる也。

大正六年十一月五日午前五時半　怡園客棧の一室電燈の下蠟燭の側にて

金巾袋の効用



南昌の客棧怡園

予は東京より携へ來れる金巾袋に、全身を包み、南京蟲の襲撃を防ぎ得たり。予の支那從者は、頸やら、手やら、各所に痛手を負へりとて、只今予に訴へ來

れり。呵々。

（九〇）南潯鐵道

中支に於ける利權の中樞

南潯鐵道は、八十哩弱の鐵道にして、其の建設費のみに、一千二百餘萬圓を投じ、往復各一回宛にして、一日の收入、八百元内外と云へば、缺損は勿論なる可し。されど其の資本金中八百餘萬圓は、我邦人の投資にして、此の鐵道は、我が中支に於ける利權の中樞とも云ひ得可し。若し此の鐵道を延長して、湖南に於ける粵漢線に接續し、以て廣東に達し、或は直下福建省の海岸に出でん乎。其の經濟上に於ける効力は、頗る重大なるものあらむ。予は南潯鐵道を以て、滿洲に於ける吉長鐵道と

現實の損益掛念するに足らず

與に、我が官民の最も力を竭す可き一なりと信ず。眼前の損益の如きは、寧ろ多く掛念するに足らざる也。吉長線延長して、朝鮮海岸に達し、南潯線延長して閩粵に達す。此の如くして、我が南北に於ける支那と

の聯絡、始めて完備するに庶幾からむ。

（九一）　支那に於ける日本婦人

支那人に嫁せる日本婦人

汽車中に、一個の日本人、予に名刺を出して挨拶するあり、南昌に赴くなりと云ふ。其の理由を問へば、娘が支那人に嫁したるを見送りて行くと云ふ。而して其の夫婿は、東京に留學し、留學中結婚し、已に三人の子ありと云ふ。予更に問うて曰く、家に第一夫人なき乎、曰くありと。予は親しく其の日支親善の結果なる、孩兒を懷ける婦人に對して、憫然の情を催ほすを禁ずる能はざりし也。

浮かと支那人の口車に乘る

予は隨處に、此の如き事件に接觸せり。日本婦人の支那留學生、若くは其他の支那人と、同棲したる者にして、其の幸福を全うし得たる者、果して幾許かある。彼等は浮かと支那人の口車に乘り、自から唯一の女房として、支那人の肉慾を饜かしめ、いざ歸國に際すれば、思ひきや家には、別に女房もあり、子もあらんとは。此の如くして妻の色衰へ、夫の情は冷かに、而して家庭間の風波は、愈〻彼女等をして、身を措くに地なからしめんとす。現に過日、成都の奥より逃げ出し來れる、日本婦人ありと云ふ。

同棲の結果は奴隷の境遇

固より眞成の意味に於ける、日支結婚は、日支親善の一端たる可し。されど日本婦人が、支那人と同棲の結果、殆んど奴隷の境遇に沈淪し、天日を見る能はざる者多きは、我が支那在留官民の、均しく認むる所にして。彼等は其の夫婿に束縛せられ、或は自から竄退して、我が官憲の保護さへ、容易に享くる能はざるの不幸に陷りつゝある也。

大正六年十一月五日午前六時　電燈已に滅して燭火纔かに照らすの際、南昌客棧怡園の一室に於て。

（九二）　陳督軍の朝餐會

潯陽江畔、九江の大元洋行より拜呈。

南昌市街を散歩す

十一月四日夜、南昌の市街を散歩す、洗馬池街は、其の目貫也。此地と、長沙とは、何れも長髪賊の兵火に罹らざりし爲め、舊觀を存し、何となく落ち附きたる風情あり。市街も比較的清潔也、數日來始めて星を見る、明日の晴ト す可き也。就床の後、江西省督軍陳光遠將軍より、朝餐の案內

陳督軍より朝餐の案內

內に預りたることを聞く。實は將軍より、予が著するや否や、明日午餐の案內を、一度ならず再度迄受けたれども、歸期の緩うす可らざるが爲めに、之を固辭せり。此に於て特に八時に轎を以て相迎へ、朝餐に案內す可く、更に專价を以て、申し込み來りし也。

辭す可らざる所以

支那に於ては大官、小官、大人、小人、何れも朝寢夜起の風習あり。此の風習に反する者は、恐らくは苦力と、予が如き變物のみならむ。されば午前八九時の會見、既に陳將軍に取りては、非常の破格也。況んや朝餐の案內をや。是れ辭す可らざる所以也。

朝起滕王閣を觀る

十一月五日、朝起直ちに南昌名所の滕王閣を觀る。閣は殺風景にも、今は警察署となり居れり。隨分の高閣也。壁には翁方綱の王勃の滕王閣序、及詩を筆したるを彫刻せり。此朝疾風にて、閣上に立ち、殆ど帽を吹き飛ばされんとす。閣は贛水に臨む。水中の川中島には、樹木、人家あり。島を隔てゝ、對岸の白沙あり。川幅約二千尺、所謂る王子安の『孤鶩與落霞齊飛、秋水

江西督軍陳光遠氏肖像

其『長天一色』の光景は、今尚ほ古の如し。歸宿間もなく、約束の時間に、一分の相違なく、督軍衙門より立派なる轎を以て、迎へに來る。一行六人、轎毎に四人の擔夫あり。轎を連ねて衙門に赴く。衙門にては、例の如く兵士捧銃、轅門開闔、軍樂吹奏、而して督軍と會見す。陳光遠將軍は、直隷の出身にして、年齢は漸く五十に接近しつゝあらむ。音吐大に、幹軀偉に、極めて愛相好き軍人也。やがて朝餐に取り掛り、卓を圍み、喫し且談ず。談は南昌鐵道延長問題より、歐洲大戰後、東亞の大勢に及ぶ。予は汽車の時間に、乘り後るゝの虞あるを掛念したるに、將軍は斷じて御心配に及ばず、發車時刻を延ばすも、差支なしと大笑せり。予は吉林に於て、孟恩遠將軍は、予等一行の爲めに、十五分發車延長の約束の下に、午餐を饗せられたり、將軍亦た此の例に倣ふ乎と答へたり。然も將軍は如才なく、長き支那料理の献立を、矢繼ぎ早に出さしめ、予等が衙門を辭し、贛水を渡り、汽車に乘り込みたるは、發車時刻十一時半に先だつ、約一時間にてありし也。

督軍との會見

且つ喫し且つ談ず

歸途記す可きなし。但だ汽車は遠く廬山の周邊を駛りて、堅に見、横に見、左に見、右に見、殆んど吾人をして廬山面目の眞を、看取せしめたるを愉快とし、此の愉快丈けは、流石の東坡も享受する能はざりしを、誇らんのみ。而して荻花滿塘、所謂『楓葉荻花秋瑟瑟』の光景は、眼前に描き出されたりし也。

楓葉荻花秋瑟々の光景

斯くて停車場より直ちに、河西領事の邸に赴き、一行の外、高比良日清、成田東亞興業、三原臺銀諸氏と、晩餐の馳走に預り、愉快なる一日を了て、夜潯陽江の船橋を渡り、大元洋行に投宿せり。

愉快なる一日

大正六年十一月六日午前五時半　九江大元洋行樓上に於て

廬山

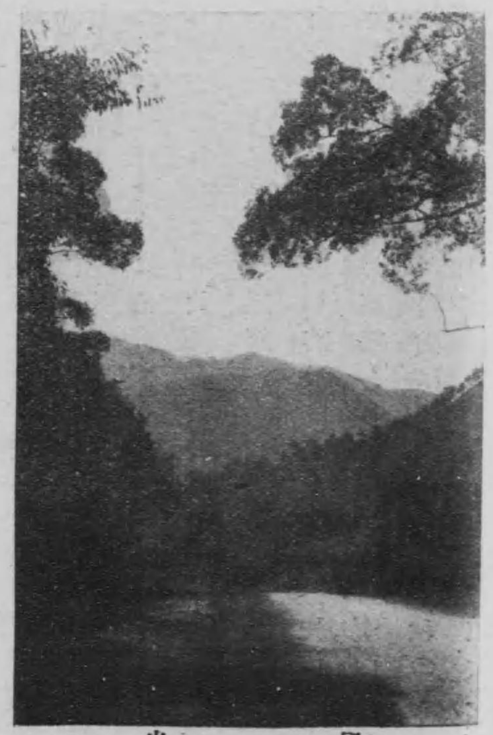
（九三）　廬山面目看來眞

自動車にて廬山へ

十一月六日、朝陰漸く霽れ、風威稍〻減ず。乃ち高比良君を東道として、廬山に向ふ。先づ小舟にて潯陽江の支流を過ぎ、廬山街道より自動車に乘る。自動車にて廬山に赴く抔は、慧遠法師も、陶淵明も、到底夢想せざりし所ならむ。されど今や廬山絶頂の一なる牯嶺は、我が輕井澤同樣、歐米人の避暑地となり、季節毎に來集する者、殆んど二千を超え、其の過半は、宣教師なりと云ふ。而して其の開拓者にして、且つ此地の借租者は、英國宣教師リットル氏也。乃ち虎溪三笑圖に、更に一人の碧眼、赤髮漢を、添加せざる可らざる次第也。

秋天洗出碧巒峋

此邊の沿道は、田、畑、小山、岡阜、村落等にして、風景何となく故園に似たり。特に百姓家の構造や、其の庭に於ける積藁の模樣や、身は恰も日本に在るの心地せり。異りたるは、水牛と、支那人とのみ。氣候は東京に比すれば、聊か



廬山

溫暖と思ふ程にて、廬山を掩うたる雲烟も、次第に披らき來り、今や廬山の面目を、當面に眺むることゝなれり。

秋天洗出碧巒峋。　双劍香爐次第新。
廬山面目看來眞。　儂比東坡多得意。

風景愈〻佳なり

双劍峰、香爐峰は、此の方面より眺め得可き、廬山中の高峰也。

道は廬山より流れ出づる、清流に傍うて溯る。周茂叔の生地濂溪は、此の附近なりと聞く。高風仰ぐ可し。愈〻進むに從ひ、風景愈〻佳也。道を挾むもの、山と云はず、岡と云はず、松にあらざれば竹。特に孟宗竹の隨處に野生し、修篁の天を拂ふもの、最も幽賞に堪ふ。而して其中に楓樹、槭樹、烏桕樹の清霜に染め出だせる、淺絳、深紅の色彩を點じ來れる、豈に一幅の好畫圖にあらずや。

點來楓桕淺深紅

水牛得得步秋風。雲外廬山望不窮。一路蒼松修竹裡。
點來楓桕淺深紅。

此邊烏桕樹、尤も多し。其葉は小く丸く、其先尖りて菩提樹に似、其實は黑く櫨に類す。蠟の原料として、櫨に讓らず。而して其の紅葉は、寧ろ此れより美也。實に烏桕樹は、南支に於ける秋の誇り也。

蓮華洞にて下車し、此れより爪先上りの道を步行す。冬期には往々、豹出で來りて、人を喰ふ由。予等は賴ひに、接觸するの機會を得ざりし也。道傍の野菊は、今を盛りに咲き出で、其の芳芬甚だ高し。道遠くして之を贈る能はざるを憾むのみ。

遺傍の野菊と其の芳芬

香爐峰

途中の百姓家に入り、山櫻と、山茶花の杖の原料、二本を得、踵を回らして蓮華洞に到れば、前に待ち受けを命じたる自動車は、影だになし。之を尋ぬれば、九江に客を迎へに還りたりと云ふ。予等は晩くも正午には、解纜す可き南陽丸に乘り込む豫定なれば、頗る當惑せり。

南陽丸に乘込む

然も高比良日清汽船出張所長を同行したれば、毫も置去りにさるゝ心配はあらず。支那人の當(あて)にならぬは、今更ら立腹する丈が野暮也。

斯くて送中迄歩行し、自動車の來るに出會し、之に乘じて還り。更らに甘棠湖に棹し、九江の市街を見物し。定刻通りに、南陽丸に乘り込めり。

而して南陽丸は、荷物の都合にて、午後一時過ぎ出港したり。

九江、南昌の間に於ける二晝夜を、有益に、且つ愉快に、經過するを得たるは、一に九江に於ける官民諸君の好意に賴る。予は逐一諸君に向つて、銘謝する能はざるを憾む。

大正六年十一月七日午前七時　南陽丸客室に於て

長江の激浪

(九四)　大孤欲倒小孤欹

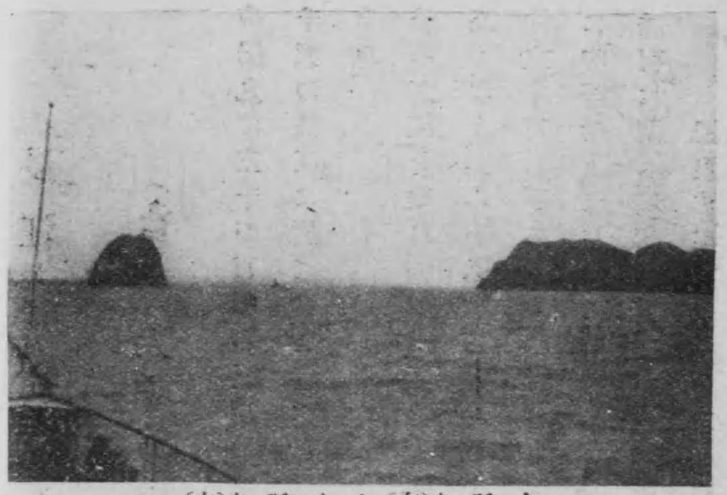
長江に於ける巨船

南陽丸は、三千四百噸の巨船也。巨船とは、長江筋に於ての事也。幅員五千呎の長江に於ては、大洋に於ける三萬噸以上にも、比較するを得可き也。

風浪と安臥の好時間

船の九江を離れ、湖口に近き大孤山を、鄱陽湖口に眺むる頃より、風浪高くなり、其の小孤山の麓を過ぐる頃は、殆んど烈風となり、甲板上に佇立す可らざるの狀あり。予等が支那從者の如きは、遂に船暈の爲めに呻吟せり。予は久し振りに安臥の好時間を得、被を掩うて眠れり。一睡夜に到り、晩餐後又た就床、一睡夜半に到れり。

濁浪排空亦一奇。大孤欲倒小孤欹。封姨怒叫魚龍舞。



大孤山(右)と小孤山(左)

正是先生詩就時。

今朝六時前、蕪湖に泊す、午後は南京の下關に著す可し。予等は南京を見物し、鎮江に赴き、揚州を見物し、上海に下り。上海に暫時滯在中、蘇州、杭州を見物し、更らに鐵道にて濟南を經、青島に出づる豫定也。果して此通りに、遂行するを得るや、否やは、未だ知る可らざる也。

大正六年十一月七日午前七時半　南陽丸客室中、蕪湖に於ける荷積の掛聲を聞きつつ。

南京の見物

(九五)　蕪湖より南京

南京城壁外の惠橋旅館(ブリッヂ、ハウス、ホテル)より拜啓。

豫定より半日の損

十一月七日、蕪湖より新米を積込む爲め、南陽丸の解纜は、漸く午前十一時半と相成り、その爲め南京の下關著は、異常の速力を加へたるに拘らず、午後四時となれり。此が爲めに豫定の半日を損したるは、餘儀なき次第也。

一種の光景を映出す

長江の風色は、例によりて妙也。但だ天曇り、氣冷かに、甲板に久立し難きを憾むるのみ。岸柳汀楊は、翠色未だ褪せず、荻花蘆花は、白く雪の如く、遠近に點綴する白帆と相接し、玆に長天無際の濁流と反襯して、一種の光景を映出せり。而して鳧雁、隨處に群を成しつゝあり。船長の話

兩度の劫運を南京市中の荒涼

蘇湖の遠望

によれば、何時の間に、斯く洲が出で來りしならんと訝りつゝ、近づき見れば、豈に料らんや、鳧雁の群ならんとはと申す程の事は、冬期中の航海に珍らしからずと。

南京は、予が十二年前の曾遊時に比すれば、更らに再度の刼運を經たり。第一革命の際には、張勳堅守の後、革命軍に占領せられ、新政府は此處に其基を定めたり。第二革命に際しては、馮國璋に攻略せらる。然も他方より見れば、上海とは、蘇、杭兩州を經て、滬寧鐵道の通ずるあり。天津とは、對岸の浦口を經て、津浦鐵道の接續するあり。亦是れ長江に於ける要衝の地たるを失はざる也。但だ市中荒涼の情態は、遠客の一瞥にも、容易に看取せらる。

此の如き變化の裡にも、依然舊翠を改めざるは、唯だ一の鍾山あるのみ。予は我が領事館に赴く途中、竹林と壞垣とを隔てゝ、暮靄の間に、馬車の上より、鍾山を眺めたる時には、何となく懷つかしき舊友に面したる如く、飛立つ心地せり。

依然たる鍾山

吾宿の主人は英國人の後家さんにて、小規模なれども、電燈もあり、浴室もあり、英國流の極めて靜かに、落ち附き、且つ清潔なるホテル也。宿の門前、予が窓下に、巨大なる大理石の碑あり。定めて南京の盛時を偲ぶ、由緒あるものならむ。

英國流のホテル

予は今ま電燈已に滅して、日光未だ上らざる際、燭光にて此文を綴れり。本日は督軍會見、南京見物の積り也。鎭江には明日赴く可し。

大正六年十一月八日午前六時十五分

（九六）故宮の廢磚

永樂帝御製の天妃宮碑

前書に記したる、予が旅窓の下にある大理石碑は、乾隆御筆と思ひしに、豈に料らんや、永樂十四年の銘ある、永樂帝御製の天妃宮碑ならんとは。されば此宿も、同宮の故趾の一部たりしこと、今更ら證明せられたり。

孝陵に向ふ

十一月七日の夜は、濕雲低く下り、朝雨を豫期したるに、八日の曉には、群雀嘖々晴を報じ、曙光窓を射れり。是れ實に予等南京見物に取りて、最大快心の一事也。直ちに馬車を驅り、領事館より清野長太郎氏——同名の兵庫縣知事にあらず、書記生也——を伴ひ、先づ北極閣、雞鳴寺を、麓より概觀し、直ちに孝陵に向ふ。即ち鍾山の陽（みなみ）なる獨龍阜にあり。途中一輪車の陸續として、厚三四寸、横五六寸、縱一尺四五寸内外の角石を、

廢磚の運搬は建築用

永樂帝御製天妃宮碑

積み來るに逢ふ。近づき見れば、何れも双手擧ぐるに耐ふる舊磚也。乃ち明の宮闕を圍繞したる、城壁全部——其門のみを剩まして——を毀ちて、今や其の磚瓦を拂ひ下げつゝある也。往年獨逸人は、此の磚一個を五弗宛に購ひ、若干個を伯林博物館に送りたりと云ふ。何れの磚も、其の面を拭へば、陰刻、若くは陽刻の文字、歴々として現はれ來る。單に產地名を誌るすのみならず、種々の文句、或は二行、三行に渉るものあり。今や此の大

何となく殘り惜し

磚瓦は、昨今製造したる、普通煉瓦同樣、市場に出でゝ、建築用に供せられつゝあり。如何に故物澤山の國とは云へ、何となく殘り惜しき心地なき能はず。予等は其の廢磚の、山の如く堆積したる中を蹈み分け、僅かに破磚一個を採拾し、完磚一個を購へり。遠路重荷の厄介物たるを慮りたれば也。

(九七) 懷古の安賣

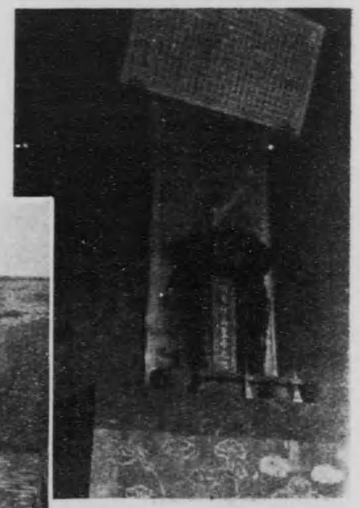
民國政府と道路の修理

南京の市街は勿論、其の附近の郊外、何れも自動車を驅り得可き、好道路也。予が十二年前、孝陵に遊びたる節は、轎に乘りたれども、今は馬車にて陵下迄來るを得たり。是れ一に民國政府の賜也。革命後の成績としては、道路の修理を以て、第一に措く可きが如し。

見る影もなき滿洲旗人の部落

但だ明の宮闕の故趾に密集したる滿城、即ち滿洲旗人の部落は、今は見る影もなく畑となり、唯だ斷瓦廢磚の、道傍に狼藉たるを見るのみ。

南京　孝陵明大祖畫像



孝陵

雜草離々たる陵道

孝陵の石馬

南京　舊帝宮の礎石

是れ實に第一革命の際に、破壞せられたるものと云ふ。滿人に對する漢人の反抗の結果としては、餘儀なき次第ならむ。明の宮闕の中心には、今は粗末なる木造ペンキ塗りの博物館を作り、其中には各種の石碑、磚瓦、若しくは其の斷片等を陳列せり。方孝孺の鮮血の痕を留めたるものと稱したる、五龍橋邊の蹈石も、今は此處に安置せらる。唯だ舊觀を改めざるは、明の宮殿の巨大なる礎石なれども、それにさへ民國幾年とかの文字を刻しあり。此の荒涼破壞の中に於て、獨り明の太祖の孝陵のみは、先づ十二年前の通り也。但だ當時は夏期にして、今は初冬也。陵上に簇立する櫟や、楢は、僅かに微霜を帶びて、其葉疎黃なるも、野菊は金の如く、蔦は錦の如し。懷古の情を促がす背景には、何等の不足なき也。慨らくは南京城壁三十二哩內外、其の一塊の土、一片の石、何れも歷史ならざるはなし。是れ吾人が單に孝陵に對して、容易に懷古の安賣を做す可らざる所以也。

荒涼破壞中に於ける孝陵

大正六年十一月九日午前八時

（九八）李督軍

督軍衙門に赴く

予等は孝陵より轉じて、督軍衙門に赴けり。是亦た近くは、長髪賊の太平天國王洪秀全の十數年間、僭宮を構へたる跡也。督軍李純氏は、未だ五十に達せざる可し。何となく袁世凱と、馮國璋とを、揑ね交せたる如き容貌也。如何にも鷹揚らしく、而して一點の隙間もなし。應接にかけては、何れの支那人も、固より如才のある可き筈なし。談話の要は、茲に記せず。但だ即今世間にては、氏が李烈鈞と通謀し、段祺瑞に反對し、江蘇獨立の旗を、揚ぐ可しとの評判なれども、予の所見にては、氏は決して容易に動かざる可し。蓋し長江一帯の三督軍は、何れも馮國璋流の調和解決を望み、段祺瑞的の武力解決に賛成せず。されば其の外形に露はるゝ所は、何れも皆な洞ヶ峠の日和見に類するものなからず。されど今日に於て支那南北の平衡を把持するものは、實に此の長江一帯督軍諸氏の力と云はざるを得ず。李督軍の如きも、若し勗めて止まずんば、中央政府に於ける一の大立者たるの日、未だ必ずしも期す可らざるにあらず。

長江一帯の三督軍

南京督軍李純氏肖像

畫舫に午餐

遊奇絶冠平生

秦淮の畫舫

予等は督軍衙門より、秦淮に赴けり。茲にて待ち合せ居たる日清汽船の羽根田輝氏と會し、一同畫舫に棹して、利渉橋邊に赴き、舫中にて午餐に有り附けり。畫舫中には、卓あり、椅子あり、榻あり。此地は支那人の最大好物なる、賭博公開地にして、又た美人の本場の一也、畫舫は支那人に取りては、食、色、賭三者を併せて滿足せしむ可き、最好の機關ならむ。予等は只だ前の一に安せり。江淮は蟹の名産地也。『黄菊花開紫蟹肥』とは、實際を道破し

秦淮の水と兩岸の敎坊

南京貢院

たる好句也。吾人は已に江南の秋色を賞し、更に江南の霜鬢に感けり。斯遊奇絶、眞に平生に冠たりと云ふ可き夫。

秦淮の水は、東京柳橋下の水よりも汚れたり。兩岸概して敎坊也。隨處に四手網を下し、頗る畫舫の往來を妨ぐ。利渉橋は、乃ち桃葉渡也。今は桃樹なくして、楊柳多し。然も亦た錢牧齋の『丁字簾前是六朝』の風情なきにあらず。一飽の後、去りて貢院を見る。乃ち南京に於ける進士の試驗場也。看來れば、僅かに人の直

貢院の現狀と壞廢

立に耐ふる、低き棟割長屋重疊として、宛も戰時の厩に似たり。而して幾千百の俊秀は、徵發戰馬同樣、此の僅かに膝を容れ、身動きの出來る丈の煉瓦壁內に、孤囚となりて、若干の日數を送らざるを得ず。名文を艸する迄もなく、大抵の者は、神經衰弱に陷らざらんとするも、能はざる也。廖柴舟が、明太祖の八股文字を以て、士を採るの法を設けたるは、秦皇の焚書坑儒よりも、其毒を世に流せりとの說、未だ必ずしも酷評と云ふ可らざるが如し。然も貢院の一半は、已に壞廢して、圃となり居れり、他の一方も、恐らくは數年を待たざる可し。

（一〇〇）清　涼　山

蓋者『吉田松陰』の支那譯

予等は貢院より、市中を散步し、其序に古書肆を素見して、端なく吉田松陰の一書を得たり。之を披らき見れば、予が舊著『吉田松陰』の支那譯にして、光緒二十九年――明治三十六年――の出版也。然も卷末には、版權所有の標記あり。固より譯者の版權也。而して更らに予が『單刀直入錄』も、改名の上、出版せられたることを、其の卷尾の廣告文によりて察せらる。予は兎も角も記念の爲め、購ひ還れり。去りて清涼山に赴き、

掃葉樓後頂上の眺望と秋色

掃葉樓に上れば、日已に晩れんとす。乃ち樓後より頂上に到れば、南京の大觀は、此に盡くと云ふも不可なし。莫愁湖、雨花臺、秦淮の楊柳、長江の白帆、鍾山、覆舟山、皆な指顧の中にあり。清涼山は、孫權石頭城の故趾也。山腹に一株の紅葉あり。何の樹たるを辨せず、但だ人を惱ますの秋色、多きを須ゐざるのみ。予等は飽かぬ眺めを、名殘り惜くも、暮色と與に山を下りて、領事館に赴き、高尾領事晩餐の馳走に預り、歸途に就きたる時は、儀鳳門已に閉ぢて、才かに護照によりて、開門を得、歸宿せり

野菊滿地道路亦た馨し

概言すれば、此頃の南京の誇りは、野菊也。野菊は、朝鮮にもあり、滿洲にもあり、北支那にもあり、長江一帶の地にもあり。されど南京に於ては野菊滿地、道路亦た馨し。眞に黃金の茵を敷きたるに似たり。而して五

十呎もある古き城壁の磚瓦の際より、長く痩せたる風雅の枝に、細き黄輪の咲き溢れたる、如何なる名手の丹誠になれる、懸崖作りの鉢栽も、恐らくは此に若かざる可し。

江左風流跡渺茫。　明時宮闕亦荒涼。　秋光十里金陵路。
野菊花開細細香。

大正六年十一月九日午前八時　方さに鎭江に向はんとする前、南京城外惠橋ホテルの一室に於て。

長江の大觀

（一〇一）鎭江と金山寺

陳龍川文章の一節と鎭江

鎭江日清汽船會社出張所より啓上。

予は幼時、陳龍川の文を愛讀し、今尙ほ其の京口の形勢を論じたる、

京口連岡三面、而大江横陳、江傍極目千里、其勢大約如虎之出穴、而非若穴之藏虎也。昔人以爲、京口酒可欲、兵可用、而北府之兵、爲天下雄、蓋其地勢然耳。

の一節を背誦せり。京口は即ち鎭江也。前遊の際、金山寺の塔を、暮靄の中に望み、焦山と甘露寺の江峽を、落日の間に過ぎ、神殆んど飛ばんとせり。されば今回は萬障を排しても、鎭江に遊ばざるを得ず、況んや一障なきに於てをや。乃ち十一月九日午前十一時四十分、南京發の汽車

に乘る。支那の汽車としては、最も清潔也。途中黄樹青林、菱陌蘋塘の間を行く、渾て皆な畫裡に入る。而して村童が平氣に、水牛の背上に居眠りしつゝある抔、到底日本にて想像の及ばぬ所なり。汽車は午後二時前に鎭江に著す。直ちに日清汽船の中川義彌君の案内にて、金山寺に向ふ。

金山寺の結構壯麗

金山寺

金山寺は寺としては、支那に於て、恐らくは結構壯麗の一ならむ。何となく我が越前の永平寺を聯想せしむ。蓋し寒冷寺にあらず、福熱寺ならむ。金山の名空しからざる也。

東坡の玉帶を見る

予等は和尚に面會し、若干の布施を出し、東坡の玉帶を見たり。此れは殘缺したるを、例の世話好きの乾隆帝が、補修せしめたるものにして、其の玉版中に、乾隆御題の詩文を彫刻しあり。樓を繞りて、高塔に上る

眞に長江の大觀

金山寺の高塔と『江天一覽』亭子

孤標天外に跨り長江脚下にあり目を極むれば、江南江北、浩蕩渺茫、烟樹村墟、一望際なし。眞に長江の大觀也。轉じて康熙帝の御書『江天一覽』の亭子に立

てば景更らに妙也。寺中に東坡、佛印兩個の肖像あり。東坡が佛印と問答の末、其の玉帶を捲上げらるゝや、詩あり曰く。

病骨難堪玉帶圍。鈍根仍落箭鋒機。欲致乞食歌姬院。
故與雲山舊衲衣。

是れ實に千古の風流也。乃ち數紙の東坡墨蹟搨本を購ひ去る。

此の寺院には康熙、乾隆兩帝、何れも六回宛駐蹕したる程にて、頗る彼等の意に適したりと覺えたり。予等もせめて一夕と思ひしが、前程あるが爲めに、悵然として去れり。而して寺庭の銀杏樹は、今を盛りに黃葉したり。予は久し振りに銀杏樹を見、端なく我が靑山艸堂門前の双樹を想ひ出せり。未だ知らず幾片の黃葉を剩まして、主人の還るを待つ耶。

寺庭の銀杏樹

（一〇二）甘露寺

甘露寺は一層の上景

予竊に惟へらく、長江の大觀、金山寺に盡くと、而して甘露寺に躋るに迨んで、更らに其の上あるを知れり。甘露寺は、金山寺と江岸に傍うて、東西相對す。金山寺は江の上流にあり、甘露寺は下流にあり。而して又た江水を隔てゝ、斜めに焦山と相對す。焦山は長江の中流に屹立する小嶼にして、瘞鶴銘を以て知らる。乃ち焦山北にあり、甘露寺南にあり、南北相對して、其中を江峽となす也。甘露寺は北固山上にあり、山僅かに二百尺に

甘露寺の多景樓

實に形勝の地

過ぎざるも、實に形勝の地を占む。寺は金山寺に比して、貧弱なるも、眞に所謂る長江の大觀は、此に在り。江傍極目千里の景に至りては、金山寺亦た獨特の妙なしとせず。されど長江其物を鮮明に、完全に、痛快に觀るは、只だ此處にあり。故人が此處に多景樓を築きたるも、偶然ならざるを知る也。掄詩あり、

江南江北夕陽多

焦山萬古屹奔波。高塔金鼇碧落摩。北固峰頭秋漸老。
江南江北夕陽多。

金鼇とは、金山寺の別名也。

秋江渺渺望無涯。返照金鼇塔影斜。三國六朝皆逝水。
白帆如鷺入蘆花。

窓外の船夫苦力ども、叫喚、喧躁、殆ど人をして推敲の暇なからしむ。乃ち泉筆を投ず。

大正六年十一月十日午前六時　鎭江日清汽船碼頭前の社宅二階の一室に於て

揚州一日記

（一〇三）淡烟一抹是揚州

漫遊より忙遊

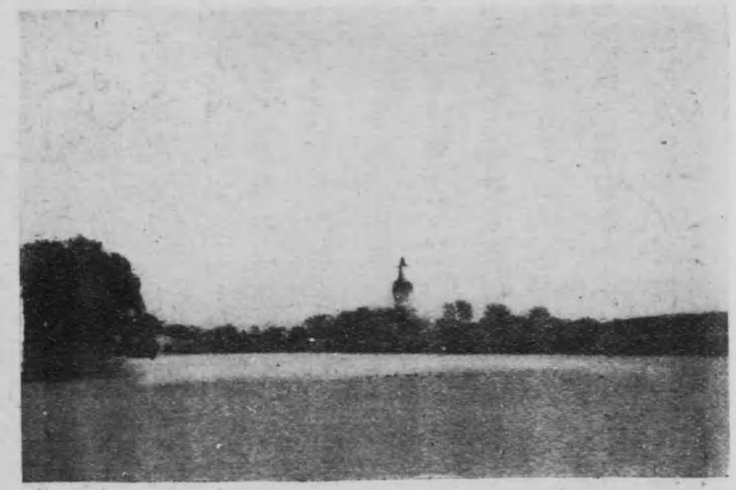
上海より啓上。長江筋の見物も、隨分念を入れたり。漢口より九江、南昌、鎭江、揚州等を遍歷し、漢口を十一月三日夜發し、上海に十一月十一日の夜著せり。中間の一週日は、予に取りて、最も愉快の漫遊たりし也。但だ光景百轉、恰も活動寫眞を見るが如く、人をして應接に遑あらざらしめたるを以て、漫遊と云はんよりは、寧ろ忙遊と云ふの、適切なるを知るのみ。

* * * * * *

江南佳麗の地揚州

十一月十日、特に小蒸汽を雇ひ、揚州に向ふ。揚州の江南佳麗の地たるは、杜樊川の『十年一覺揚州夢』の句を誦せざるも、所謂る腰に十萬貫

淮南の運河と煬帝の功



揚州の運河

の錢を纏ひ、鶴に騎りて揚州に下るの俗諺あるを以て、知る可し。唐人句あり曰く、『人生唯合揚州死。禪智山光好墓田。』と。今日に於ても、金持の隱居所は、實に揚州也。予が前遊の際、杭州領事として、西湖の勝を管領したる、高洲太助君、今や民國鹽務官として、揚州に在り。是れ予が道を枉げて、斯遊を敢てしたる所以也。

此日朝來天陰り、風寒し、小蒸汽は瓜州を經て、淮南の運河に入る。瓜州は即ち王荆公が、『京口瓜州一

水間』の句の通り也。運河は隋煬帝によりて、開鑿せられ、明に至りて完成し、天津に、通ず。實に支那南北聯絡の一大動脈也。予は此間を通過して、何となく蘇士運河を想起せり。若し利澤を後世の民人に、及ぼしたる點を擧げば、煬帝の功、豈に神禹の下に在らん哉。

六朝金粉水悠悠

予前日、金山寺の高塔より揚州を望み、詩あり、曰く。

六朝金粉水悠悠。南北風雲今亦愁。獨立金山寺邊望、
淡烟一抹是揚州。

運河を上る者、下る者、挽舟する者、帆を揚ぐる者、江葦を滿載する者、苦力や、豚を乘せる者、野菜、穀物類を積む者、而して槳を搖かし、帆綱を手にする者、婦女亦た少からず。

高洲君の邸に達す

小蒸汽は遠慮なく、此中を押し分け、文峰塔の下を廻りて、揚州に入り。予等の上陸して、高洲君の邸に達したるは、已に十一時を過ぎたり。

（一〇四）平山堂に遊ぶ

支那富豪生活の皮相觀

高洲君の邸は、前日本公使李世鐸氏の家にして、一大伽藍も同樣也。然も高洲君の占むる所は、僅に其の離家にして、之に接する本邸は、更に巨大なりと云ふ。

平山堂見物に赴く

揚州史可法の墓

午餐前小閑を偸み、其の附近なる一富豪の邸を見る。予は此の家屋に入りて、支那金持の生活の皮相觀を得たり。

本來予等は、當日

午後四時、鎭江發の鳳陽丸に乘る可き豫定たりし也。然も斯くせんには、揚州を午後二時には去らざるを得ず。乃ち高洲君の爲めに說破せられ、乘船見合せの電報を發し、午餐の節を投じて、直に高洲君夫婦と相伴ひ、平山堂見物に赴けり。平山堂は、揚州名所の隨一也。

途中の光景

先づ史可法の祠堂に赴き、其の墓を弔し。其の附近の梅花嶺に、高洲君が日本より移植したる櫻、楓の成長し、楓葉の半ば已に紅なるを賞し。天寧寺を過ぎ、扁舟に乘じて、平山堂に向へり。聞說、北京萬壽山の昆明湖堤は、此地の風景を摸したる也と。或は然らむ。

光景歷々指點すべし

一水溶々、滄波を揚げ、兩岸の老柳は、時に翠竹を交へ、時に綠槐、桑樹を錯へ、或は村に連り、或は園に接し、或は寺あり、或は塔あり、水中偶〻小嶼のあるあり。蘆葦の叢生するあり、而して隨處の芳草は萋々として、毫も其色を變ぜざる也。舟は幾回となく目鏡橋を過ぐ、而して橋上或は樓閣あり、亭子あるを見る。乾隆南巡の際には、揚州美人を徵發し、錦

扁舟已過五亭橋

平山堂と歐陽修

揚州五亭橋

繡の纜を結び、御舟を挽かしめたりと云ふ。豪興想ふ可し。其の五步に一樓、十步に一閣、何ぞ唯だ煬帝のみを咎めん哉。

長堤衰柳晚蕭蕭。秋老淮南艸未凋。解識平山堂漸近。扁舟已過五亭橋。

五亭橋とは、橋上に五亭あるを以て名く、乾隆時代の遺物ならむ。

水窮まる所を九曲池とす。池盡きる所蜀岡となす。平山堂は、岡上阜陵、萬松の中にあり。歐陽修、蘇東坡等淸遊の蹟也。其の平山堂と稱す

るは、江南の山を、平遠に望むが爲にして、歐陽修の命名に係る。寺を法淨寺と云ふ、歐陽修の肖像を安置す。

庭前の斑竹を伐て還る

予は寺僧に請うて、庭前の斑竹を伐り、携へ還れり。而して午後六時、高洲邸に歸著したる頃は、一同皆な寒殺せられんとしたり。蓋し風勁く、氣冷かなりしを以て也。前遊西湖に於て、高洲君の爲めに、熱殺の苦に遭ひ、今遊平山堂に於て、寒殺の苦に遭ふ。是亦た宿緣にあらずと云ふ可らず。但だ其の苦を喫したるもの、主客同樣たりし一事を、遺る可らざる也。晩餐には、揚州料理の馳走に預り、頓に溫暖を覺え、再び小蒸汽に上りたるは、已に十時に近く、鎭江に著したるは、午夜を過ぎたり。揚州の遊、僅かに一日、而して其の約略を得たるもの、偏へに高洲君の厚意に依る。是れ予の最も感謝する所也。

高洲君の厚意を感謝す

（一〇五）焦山

一帆風快流焦山に向ふ

更に高洲君に感謝す可きは、焦山に遊ぶの機會を與へられたる事是也。若し豫定の如く、十日午後鎭江發の汽船に乘らば、到底其望を果す能はざりし也。されど延期の結果は、寧ろ十一日午後發の汽車にて、上海に赴く可しとなし。午前中の時間を利用し、日清汽船鎭江出張所の中川義彌君夫婦を誘ひ、相伴うて支那船を雇ひ、順風快流、一帆直ちに焦山の麓に達したるは、十一月十一日午前九時過ぎにして、航程一時間内外に過ぎざりし也。

大江中に屹立の小嶼

焦山は、大江の中に屹立する小嶼にして、巖石を骨とし、樹木、寺觀を肉とし、宛も我が江ノ島に肖て、更らに小也。而して其の北側に、更らに二個の危礁、水底より峙つ、之を松寥山と名く。此邊江流矢の如く、大渦小渦、大波小波、盤旋、回轉、所謂る阿波の鳴門も啻ならず。岸に上れば、銀杏の老樹は柯を交へ、麓に連なる寺院を蔭し、人をして坐ろに、仙境に入るの感あらしむ。

定慧寺より吸江樓

予等は先づ焦山名物の、瘞鶴銘の拓本、其他を購ひ、焦山の本堂たる定慧寺に抵り、隈なく見物し。轉じて石磴を蹈み、鏡江樓を過ぎ、絶頂の吸江樓に至る。吸江樓は古の吸江亭也。

吸江亭上倚闌干

吸江亭の樓上の闌干に倚れば、長江の面目は、北固山上より望むよりも、更らに其の脉絡井然、手に挹るが如く、明瞭ならしむ。約言すれば、北固山は金山寺に優り、焦山は北固山に優る。而して、三所三個の特長ある、亦た誣ふ可らざる也。

江天一覽金山寺。　多景樓頭眼界寬。　欲識長江眞面目。
吸江亭上倚闌干。

江天一覽ば、康熙帝の金山寺の勝景に題したるもの。多景樓は北固山上にあり、劉改之が『景於多處最多愁』の句ある所也。

枕江閣にて精進料理

山を下り枕江閣にて、精進料理を喫す。盤上の石花菜は、我が湘南老龍菟に於て、恒に用ふる物に同じ。端なく鄕味に接觸し、一段の甘味を覺えたり。而して更らに寺僧に請うて、唐代の老柏と稱する、巨樹の枯枝一片を伐り、歸舟を廻らしたるは、午後一時なりき。然も往時の順風は、還時の逆風也、其の順流は、乃ち逆流也。往時の快を喫したる予等は、正しく還時の苦を喫せざる可らざる也。

長江の岸に沿うて徒步

舟は寸進尺退、江中を回轉せり。稍く對岸に近づけ、堤上より綱にて挽き行かんとすれば、綱は乍ち中斷せり。乘車の定時は、刻々迫り來れり。此に於て一同上陸、直ちに長江の岸に沿うて徒步し、甘露寺の麓を過ぎ、鎭江に著したるは、午後三時にして、辛くも午後四時發の、上海行汽車に乘るを得たり。

望外の眼福

然も長江沿岸徒步の如きは、苦中の一樂にして、望外の眼福と云はざるを得ず。此日空澄み、氣穩かに、理想的小春天氣也。江岸に傍うて小徑を行けば、江村生活の實況、屢々眼に在り。予は詩を案じつゝ徒步し、殆んど身の鎭江に達するを覺えざりし也。

好事何人銘瘞鶴

焦山突兀挿江流。老木危崖境自幽。好事何人銘瘞鶴。
華陽眞逸亦千秋。

華陽眞逸とは、何人なる乎、是れ千古の疑案也。或は王羲之と云ひ、或は陶弘景と云ふ、或は顧況と云ふ。然も華陽眞逸の名を以て傳へられたる瘞鶴銘は、大字の標準也。

大正六年十一月十二日午前九時半　上海藤村男爵邸に於て

上海雜信

（一〇六）上海の發展

上海の上景氣

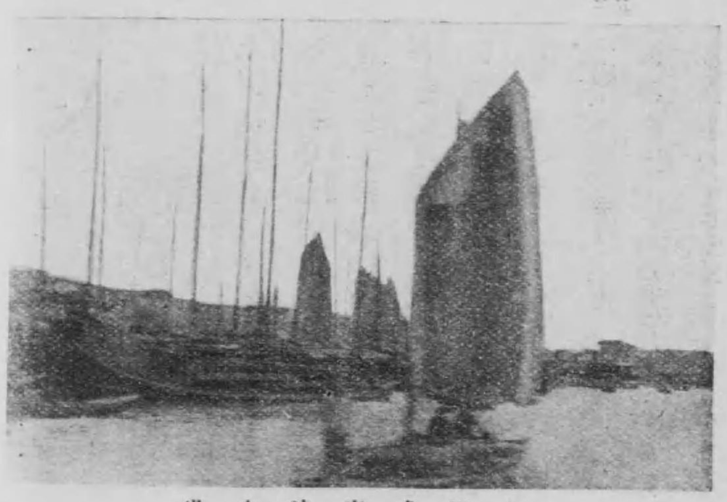
上海は、昨日より競馬季節始まり、各會社倶に半休、若しくは全休の姿也。戰時中とは申しながら、其の景氣尙ほ驚く可し。而して此の競馬には、一切支那人の參加、加入を容さず。單に此地のみならず、漢口の競馬倶樂部も亦た然り、上海公園も亦た然り。門戸開放、機會均等、四海兄弟同胞主義の本家本元たる、白皙人の作爲としては、亦た一興なしとせざる也。

十二年前に比して著明の發展

上海の發展は、十二年前に比して、隨分著明也。予等は小蒸汽より其の河港を上下し、造船所、貯炭所、製造所等の櫛比して、漸次下流の河岸に膨脹しつゝあるを見、快心の情に禁へず。但だ戰爭の爲めに、紡績會社

日本人倶樂部

又た宗演老師と會食



上海戎克波止場

の形骸丈が出で來りて、其の器械を据附くる能はず、空屋の儘に立ち。獨逸汽船が、民國の國旗を翻へし、獨逸郵便局の門戸が、封印をなして閉鎖せられ居る抔、聊か戰時の影響なしとせず。

日本人倶樂部も見物せり、三十萬圓を投じて設立したる丈ありて、上海に於ける日本人を、代表するに不足なし。而して倶樂部は、最も多く、最も善く利用せられつゝあるが如し。

昨夜又た宗演老師一行と、予等の

寄寓する男爵藤村義朗氏邸にて、會食せり。師は今朝解纜の船にて、歸國の由なれば、此を以て旅行先に於ける、會同の終幕と做す可し。要するに能くも、異途出會の緣を、繰り返したるものかな。上海は例年より寒氣早しと云ふ人あるも、北方より來れる予は、實に其の氣候の溫和を快享しつゝあり。

大正六年十一月十三日午前六時

（一〇七）支那語の必要

戴天仇氏の來訪と六三園の午餐會

十一月十三日、又た好天氣也。午前戴天仇氏來訪。正午六三公園にて、上海に於ける日本紳士連の、午餐會に赴く。石河幹明氏同賓たり。轉じて上海名物の競馬を見る、否な競馬を見る人を見んが爲め也。競馬は露骨に云へば、一種の賭博にして、競馬場は公開の賭博場也。賭博にかけては、英人と、支那人とは、共通嗜好を有す。但だ英人專ら馬を以て具と

なし、支那人專ら牌を以て具と爲すのみ。

競馬場中の日本人

馬は蒙古馬にして、アラビヤ種に比すれば、寧ろ小也。騎手も可なり巧者なるが如し。但だ驚くべきは、場中に日本人の群集しつゝあると是れ也。是れ上海に於ける日本人口の夥多なるが爲め乎、將た日本人に投機心の、亢進しつゝある徵候なる乎。

日支記者の晩餐會

夜は日本人倶樂部に於て、日支記者の晩餐會あり、亦た盛會なりき。佐原篤介君が、會主として支那語にて、開會の辭を演じたるは、聊か予を驚かしめたり。君が英語、英文に堪能なるは、熟知の事實なるも、斯る隱藝ありとは、予も人も思ひ及ばざりし也。石河君の演說に次ぎ、予も一場の挨拶をなせり。別に何等の意見をも開陳せず、唯だ日支親善の捷徑として、日人支那語を習ひ、支那人日語を學び、其の日常の交際、應接に於て、通譯を用ひず、互ひに自他の國語を以てせば、情意疏通に於て、頗る便宜ならむと云へり。

日支親善の捷徑

支那語學習の必要

予は眞に斯く感せり。少くとも日本人側に於ては、若し支那に專を做さんと欲せば、若し支那に於て、將た支那に向て、志を逞うせんと欲せば、何よりも先づ、支那語の學習が大切也。此れは贅澤にあらず、道樂にあらず、物數奇にあらず、全くの實用也。全くの必要也。支那に於ける商戰、外交戰、社交戰、勢力戰に於て、最上の利器也。予は日本に於ける青年諸君が、切に此點に留意せんことを望む。

彈き語り同樣の余洵君の演說

挿話元に返りて、予が挨拶終るや、支那側の一人、神州日報記者余洵君は、起立して、滔々支那語の演說を始め、一節了る毎に、又た滔々と日本語にて、自から通譯し、宛も豐竹呂昇の彈き語りも同樣にして、以て一場の喝采を博したり。是れ蓋し支那の記者中には、予の希望を實現する者、眼前に其人あるを示したるならむ。支那人の語學に於ける、天才に庶幾し。日本人遠く之に及ばず、乃ち及ばざるも、日本人が自から語學に拙なるを以て、一種の誇りとなすは、大なる心得違也。前例已に英

前例已に英人にあり

人にあり。今や英人は遲蒔ながら、支那各地に於て、支那語研究の學校を設け。苟も各會社に於て、支那語に通ずる者は、特別の手當金を與ふることなせり。我が國民たるもの、豈に猛省せずして可ならん哉。

大正六年十一月十四日午前六時　上海に於て

（一〇八）變化ある一日

各行脚者中の緩行者

十一月十五日、東京を出でゝより、全二個月となる。今回の各行脚者中に於て、恐らくは予等一行が、最初に來り、最後に去るものならむ。諸君は急行車に乘り、予等は緩行車に乘る。悠々又悠々、支那の光景に流連して、聊か慚惶の感なきにあらず。

＊　＊　＊　＊　＊

呉昌碩老人の來訪

十一月十四日も、隨分局面變化多き一日なりき。午前には、上海に於ける藝術家として、否な恐らくは、現時の支那に於ける藝術家として、其

孫洪伊氏肖像

戴天仇氏肖像

柏文蔚氏肖像

の特色を發揮しつゝある、吳昌碩老人の來訪を添くせり。氏は篆刻に於て、浙派の後勁たり。而して其書亦た、一種の氣韵あり。畫に至りては、氣骨豪舉、用筆快利、色彩鮮濃、蓋し一時の雄也。而して其の風采を見れば、年齡古稀を過ぎ、白皙、柔膚、色溫、氣和、髮毛を小く頭に束ね、何となくお婆さん然たり。翁貽るに缶廬詩二冊、及び吳氏祖先の集三種を以てす。今ま缶廬詩を讀むに、翁は更らに詩に於て、亦た優に一家を做すものゝ如し。

南方派諸氏と會見專ら孫洪伊氏と問答

幾もなく孫逸仙氏の邸に、南方派諸氏と會見す。專ら孫洪伊氏と問答し、戴天仇氏其の通譯者たり。而して柏文蔚、丁人傑二氏亦た座に在り。孫洪伊氏は、前內務總長也。其細くして光る眼と、其の整調したる面と、其の美髯と、而して其の態度の沈重なると、一見して南方派中の巨擘の一たるを知る可し。氏は實に支那人には珍らしき程の低音にて、滔滔と語れり。其の論旨の當否は、姑らく置き、所說明晰、毫も脫線の氣味

上海支那新聞各社の招待會

なし。戴氏の日本語に到りては、天下一品、日本人も恐らくは三舍を避く可し。予等は會食の午餐の筯を、中途にして投じ、更らに一品香——亭名——に於ける、上海支那新聞各社の招待會に赴けり。上海申報社長史家修氏、驩迎の辭を朗讀し、予聊か答辭を陳べたり。諸氏中には、近く觀光團を組織し、東京に向ふと云ふ。果して此の如くんば、是れ最も悅ぶ可き事也。此の如くして、予等は一日に、二回の午餐會に列したる也。

上海龍華寺の塔

龍華寺より江南機器局

轉じて自動車を龍華寺に驅り、寺塔を見る。それより江南機器局を、門外より一覽して還れり。上海近郊は、道路開け、溝渠通じ、桃塢、菜圃相接す。春色駘蕩の候、想ひ見る可し。

外字新聞記者の晩餐會

夜は八時より上海倶樂部に於る、外字新聞記者の晩餐會に列す。北支那日々主筆グリーン氏と座を隣にす。予氏に問ふに戰爭の前途を以てす、氏曰く、今後少くとも二個年を要せむと。予曰く、英國民果して戰爭に倦むなきを必とする乎と、氏曰く、決してさる心配なしと。然も予は外國人として、多少の掛念なき能はず。予の向席に、クラーク老人あり、彼は自ら極東第一の老記者と稱せり。彼れ馬關砲擊の際、英艦にあり、其の日本に來りしは、予が出生と相前後し、其の長崎に新聞を創刊したるは、明治の初期なり。今や八十に近き年齡を以て、依然新聞に從事しつゝありと云ふ。其の元氣愛す可し。新聞記者は、或る意味に於て、不死ならざる迄も、不老也。否な不老ならざれば、記者たる能はざる也。

クラーク老人

大正六年十一月十五日朝　上海に於て

（一〇九）岑春煊翁を訪ふ

若手揃中の老輩

即今の支那は、朝野與に若手揃ひ也。其中に在りて、老輩として尚ほ政治的生命あり、信望あり、其の發言が、實際の政局に於て、較量せらるゝもの、北に徐世昌あり、南に岑春煊あり。予は十一月十五日の午後、豫約によりて、岑翁に面するを得たり。

南陽寄廬の門札

南陽寄廬の門札を掲げたる門に抵れば、門半ば鎖し、關人不在を以て辭す。強ひて名刺を出せば、持して奥に赴く間もなく、全門を開き、直ちに自動車を通して、玄關に横附けせしむ。

岑翁は毛色の變りたる快活男兒

岑翁は、實に支那人中、毛色の變りたる快活男兒也。彼の政治主義は、利害得失よりも、正邪善惡にあり。彼は北方の軍國主義にあらず、南方の民主主義にあらず、云はゞ孔孟流義の政治主義者也。而して其の自ら

岑春煊氏肖像

彊毅にして、清廉なるは、彼をして小規模ながらも、其の主義の實行者たらしむるの、資格なしとせず。彼が一たび總督となるや、其の部下の贓官汚吏は、未だ彼の面を見ざるに震慴せり。彼や今ま滬上に閑居するも、隱然天下の年寄役を以て任じ、南北を打て一丸となすの、役目を勤むる者、乃公を措いて復た誰かあるの概あり。

直に胸中の壘塊を吐く

翁は予と握手するや否や、挨拶もそこ〳〵にして、直に胸中の壘塊を

吐き來れり。曰く、予は必ずしも日本政府に、日支親善の誠意なしと云はず。但だ若し眞に日本政府の宣明したる如く、無干渉を徹底せしめば、南北交綏、調停、統一の業、今日に於て、已に難きにあらざりしならむ。然るに日本當局者が、北方に金錢を融通し、且つ武器さへも融通せんとするが爲めに、北方は之を恃んで武力解決を要望し、南方亦た之に反動して、愈〻其の地歩を固執す。而して其の災害を受くる者、唯だ億萬の生靈あるのみ。此の人民を疾苦に陷れつゝある、責任の幾分は、日本政府亦た甘受せざる可らずと。

舊人物中見逃し難き一偉漢

彼の意見は、南方に偏したる立場よりの議論也。されど彼が少くとも、一片の誠意を以て、之を主張しつゝあるは、何人も之を認容せざる可らず。彼れ風采一野翁の如し。明敏の相なく、寧ろ魯鈍の風あり。されど精悍の氣は、眉宇の間に露はれ、意志の堅固なるは、其の顎骨の角張りたるにて證明せらる。而して眞摯の態度、人をして親み近かしむ。支那の舊人物中には、蓋し見逃し難き一偉漢也。

大正六年十一月十六日朝　上海に於て

（一一〇）議論日

南方派領袖の晩餐會

十一月十五日は、寧ろ議論日にてありき。同夜は南方派領袖の案内にて、余邨園に招かる。園は廣濶にして、花木多し。李烈鈞氏の故巢なりと聞く。譚人鳳、孫洪伊、柏文蔚、戴傳賢、譚延闓、丁人傑、蔣尊簋、彭程萬の諸氏主人役たり。戴傳賢は、即ち日本にて知られたる戴天仇氏也。

譚人鳳氏と談論

予が座に入るや、談話は直ちに譚人鳳氏と交換せられたり。而して會食中は勿論、會食後も繼續し、遂に約三時間、幕無しに意見を交換せり。悉く、予の意見を擊退したれば、寧ろ意見を闘はしめたりと云ふを、精當と做す可き歟。

譚翁の風采と學殖人格

譚翁は本年五十九歳と云ふ、軀幹長大ならざるも、瘦骨稜々たり。顔に異彩なきも、目に稜角あり、顴骨聳え、口元締る。乃ち單に面貌と云はず、緊張の氣、全身に溢るゝものに似たり。故黄興の師にして、革命黨の諸氏、概ね翁に師事し、兄事するものに似たり。蓋し學殖、人格、自から其の位置を占むるに足るが爲ならむ。

寧ろ一種の理想家

予翁に著述ある乎と問へば、翁は言下に、四十以前は、科擧に沒頭し、四十以後は、革命に沒頭す、豈に其の餘裕あらん哉と。彼は孔夫子の信者にして、大同主義者也。即ち孔夫子を以て、彼の革命主義の本尊となしつゝある也。彼の議論は經學、史學、何れにしても、餘りに型に箝まり過ぎたる憾なきにあらず。されど其の思想は、固なるも淺ならず、其の根柢は、狹きも深く、且つ確か也。翁は儒教主義を以て、民主思想を解釋しつゝあり。而して實際の經綸に就ては、寧ろ一種の理想家と云ふ可きに庶幾し。

二十世紀の現在尚ほ秦楚の決鬪を繰返す

予曰く、春秋戰國以來、支那には中央に周公、孔子を主とする、周の系統あり。北方には商鞅、韓非、李斯を主とする、秦の系統あり。南方には屈宋を主とする、楚の系統あり。而して老莊の思想は、南北俱に其の人情、習慣、制度によりて、適宜に應用せらる。周已に滅び、天下は秦楚の決鬪となる。秦、楚を滅して、天下を一統し、楚復た秦を滅して、天下分裂す。漢高は秦の相續者となりて、楚を滅し、天下再び一統せらる。而して尚ほ吳楚七國の亂を免れず。今日支那の政局を察するに、直隷軍閥派は秦にして、南方革命派は楚也。二十世紀の現在、尚ほ秦楚の決鬪を繰り返しつゝあるに非ずやと。然も此の如き議論は、頭の固き譚人鳳氏よりも、寧ろ若手の戴天仇、丁人傑諸氏に於て、或は聊か諒會する所あらむ歟。

大正六年十一月十六日午前六時半　上海に於て

（二二）十一月十六日

段內閣總辭職の北京電報

昨十六日の夕、段內閣總辭職の北京電報に接せり。未だ其の精詳なる通信を得ざれば、評說するに由なし。但だ予は十五日の夕、南方派領袖の一人、譚人鳳氏に對し、貴下の高論崇議は、兎も角も。予の所見によれば、北京に於ける政府筋各銀行紙幣の、大暴落は、確かに政界の變調を豫告するもの也。一旦段內閣顛覆の日に際せば、諸君は其の善後策に於て、遺算なき乎と切り込めり。而して今や此報を聞く。予は北京に於て、段祺瑞氏其人が、餘りに自から用ひ、孤立援なきを知れり。恐らくは、今後何人が、內閣の衝に當るも、先づ北京政府丈けは、馮國璋の天下なりと見る可きに似たり。

* * * * * *

北京の政局は、今尙ほ不定也。廻轉走馬燈の如く、再び段の世の中となれり。但だ其の前途に就ては、何人も保證する能はず。

大正七年四月十三日　　著者

* * * * * *

內外綿會社を見る

十一月十六日、內外綿會社に赴き、取締役武居綾藏氏の案內にて、其の工場を見る。工場は蘇州運河に臨み、新舊兩所あり。合計約十二萬錘と云へば、大工場たるや知る可し。武居氏は、上海に於る金利の高きと、日本內地の商法を、杓子定規に適用せらるゝとに就き、苦情を陳べたり。何れにしても日本人が、支那に來りて工業を起すは、單獨にせよ、支那人と合辦にせよ、最も奬勵す可き事也。

支那綿の缺點は量よりも質

予は武居氏に向ひ、折角紡績會社を起す程なれば、願くは一歩を進めて、其の原料を精善ならしむる爲めに、綿作改良會社を設けては奈何。それには口舌の能くする所にあらず。自から支那に於て、大農園を經營し、支那人に向つて、其の模範を示す可きのみ。支那の綿は無盡藏也。今後蒙古、及び新疆に耕作せらるゝに到らば、更に無盡藏也。果して此を改良せば、復た印度、米國に賴るの必要なけむと云へり。蓋し今日支那綿の缺點は、量にあらず、質なれば也。

英字新聞記者の午餐會

＊　＊　＊　＊　＊　＊

斯くて上海倶樂部に於ける、英字新聞記者連の午餐會に列す。記者連以外藤村男、山本達雄氏、上海民政會議長ビアース氏、米國總領事サムモンス氏、日英の各副領事諸氏あり。北支那日々新聞主筆グリーン氏、予の爲めに祝杯を擧げられ、予聊か答辭を陳せり。日、英、米の三國民、一堂に會して交驩する、亦た現時上海に於ける、好現象たるが如し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

六三園の小雅集

日本人倶樂部の同郷人會

此より六三園に於て、吳昌碩、王一亭、李梅菴、其他支那側の文雅の諸君子と相會す。諸君松竹梅菊の合作をして、予に貽らる。王一亭君予が肖像を達磨化し、吳翁其上に詩を題して貽らる。諸君芳意謝するに餘りあり。而して是皆な予が東道の主人、藤村男の斡旋に賴る。宴半ばにして、日本人倶樂部に於ける同郷人會に臨む。井手君、島田君、大島君等、皆予が舊知也。久振りに箕坐して、牛鍋を突きつゝ、無遠慮なる熊本訛を發揮して快話す。亦た一興也。此の如くして十六日は了れり。予は今朝より杭州に赴かんとす、次報は西湖の畔より發せんことを期す。

大正六年十一月十七日午前五時半　上海に於て

上海より杭州

（一一二）勝景已知杭府近

好天氣と汽車旅行の愉快

十一月十七日午前七時半、杭州に向ふ。此日天曇る、然も幾もなく晴れ、旅行に取りて理想的好天氣也。予が前遊の際には、運河よりして杭州に赴けり。されば汽車の旅行は、頗る予に愉快を加へしめたり。隨處稻田の中に、竹林あり、人家あり、而して大小の溝渠、運河は、縱横に通じ、實に人をして、如何に南支那に於て、水運の便が、利用せられつゝあるかを想はしむ。稻は已に收穫して、田畔に積み上げたるもの多く、然も未だ刈らざるあり。宛も玉川附近の昨今に似たり。但だ目障りとなるは、田と云はず、圃と云はず、隨處に墓あり、棺の露出するあるのみ。汽車の進行に從ひ、桑圃漸次多きを加ふ。桑は灌木仕立にして、之を拳桑と云ふ。毎年新枝を刈り取る也。停車場毎に乘客雜沓す。

逸上の光景と玉川附近の昨今

杭州領事館

江蘇、浙江の富、天下に冠たるもの、偶然にあらざる也。已にして山近く、翠松林中に、紅葉の多きを見る。

詩あり、

平田一望半收禾。　柳浦桑村次第過。
翠松樹裏錦楓多。　勝景已知杭府近。

瀧上領事の出迎

斯くて百十三哩の沃田、豐圃の裡、畫景、詩趣の中を過ぎ、十二時半に停

車場に達し、鄭友濶上領事の出迎に接し、十二年振りに氏と舊歡を叙し、併せて湖山と舊歡を叙するを得たり。曾遊の際には、瀬上君は陸軍通譯として、北京にあり、屢〻予が爲に其勞を取られたり。今や君には美なる賢夫人と、五人の子供あり、洵に善く變じたる者と云ふ可し。

新市街と大道との出來

君は予等一行を、領事館に留宿せしむ可く、用意したる旨を語られたれば、其の厚意を甘受し、直ちに之に赴けり。途中滿洲屋敷、悉く一掃せられ、新市街と、大道との出で來りたるには、聊か驚きたり。是れ蓋し民國革命の餘澤と云ふ可き歟。

理想の實現と領事館の食客

予曾て記して曰く、『若し風流第一の領事館を求めば、予が知り得る限りにては、我が杭州の領事館に過ぐるものなかる可し。予は固より官吏たるを希はざるも、若しさる場合ありとせば、一箇月にても、此地の領事となりたしと思ふ也。併し領事たらざるも、食客として寄寓せば、更らに佳也』と。今や十二年後に於て、其の理想は實現せられ、領事館の食客たり。人事意の如しとは、果して此事歟。知らず予何等の善根ありて、此の福德を享受するを得たる乎。

小舟を艤して西湖に遊ぶ

（一一三）西湖舟遊

天氣は愈〻小春日和となれり、一刻も空過す可らざる也。乃ち午餐の筯を投じ、領事館の下より小舟を艤し、西湖に遊ぶ。此日外套を要せず舟遊尤も佳也。當時湖上の舊行宮に於て、天津水災義捐金募集會の催し最中にて、湖中の舟織るが如く、水仙王も、林處士も、將た康熙、乾隆兩帝の靈も、定めて驚殺せられつゝあるならむ。予等も舟より上りて、蝗の如く群がる男女を押し分け、漸く其の餘興場、展覽會、販賣店等を通り拔け、故行宮の最高所に上り、湖中の鳥瞰的觀察をなせり。而して其の傍なる文瀾閣を過ぎ、それより移したる四庫全書を、其の隣接地なる、浙江圖書館にて一覽し、更らに湖心亭より三潭印月、退省菴等を歷

四湖　三潭印月

遊し、舟を廻らせば、夕陽已に雷峰塔の半面を射り、暝色漸く湖面を包み、湖上の微風漸く冷を覺えんとす。本來雷峰夕照と稱したるもの、康熙帝雷峰西照と改めたりと云ふ。何の故たるを知らざる也。雷峰塔は、五代の吳越王妃、黃氏の所建に係る磚塔にして、磚皆な赤色。而して其の頂上より半身迄、藤蘿、雜樹叢生し、遠方より望むも、其の古色の蒼然として、色彩の配合の妙なるを覺ゆ。況んや日光の反射して、山光水色と、相ひ映對するに

四湖　三潭印月より雷峰塔を望む

於てをや。

雷峰塔畔夕陽斜。
湖上蒼烟淡似紗。
風景依然吾老矣。
白頭重宿水邊家。

予は尙ほ記せんと欲する事多し。されど今や曉光湖面を照らし、予が寢室の硝窓に映じ、遊意勃然、予をして室内に筆を取る能はざらしむ。

大正六年十一月十八日午前七時　寶石山下、白公隄邊、西湖々畔の日本帝國領事館の階上、湖

に面し、湖を隔てゝ雷峰塔と相對する一室に於て。

（一一四）西湖一周記

最上の遊覽日

十一月十八日は、最上の遊覽日也。乃ち瀬上領事を促がし、其の日曜なるを好機として、相拉へ、午前九時頃、先づ人力車にて斷橋を渡り、白沙堤より錦帶橋を過ぎ、孤山に到り、林逋の蹟を訪ひ、荒草を蹈み分け、西冷橋上に立ち、秋水の底に遊魚を數へ、蘇小青の塚に、小石を投じて、冥福を祈り、革命の女俠秋琴女史の墓前より、岳王墳に抵れり。

千古西湖屬美人

不レ嘆紅顏化作レ塵。　落花芳艸毎年新。　小青塚接二秋琴墓一。

千古西湖屬二美人一。

岳廟にて若干の搨本を仕入れ、清漣寺を徑す。門前の老樟山の如く、池中の大鯉舊に依りて多し。五色魚と稱すれども、予には紅鯉、黑鯉の二種を認むるのみ。此れより靈隱寺に向ふ。此邊蕨と、墳墓と、乞食とを以て有名也。滿地皆な蕨、春晩の際、想ふ可し。若し伯夷叔齊をして、此處に來らしめば、餓死の厄を免かれたりしならむ。但だ蛙を喫し、蛇を喫し、蘆芽を喫し、木皮、土塊さへも時に或は喫するを解する、支那人にして、蕨を喫する者少しとは、意外千萬也。

靈隱寺に向ふ

仰山なる支那の墳墓

西湖　四冷橋畔蘇小青の墓

墳墓は、大谷師をして、支那墳墓亡國論を發せしめたる丈ありて、實に仰山也。而して隨處に細長き家屋あり、是れ死屍を殯する所也。即ち死屍の倉庫也。彼等は死屍を棺

支那第一の靈境

四湖　岳王墳

中に入れ、此處に之を安置し、年を經て始めて之を葬る也。靈隱寺の會式日は、乞食の出盛り日にて、大谷師の如きは、一路五百餘人を數へたりと聞けども、予等は幸に人出少き日に來りたれば、乞食も亦た從て少かりし也。

靈隱寺は、宗演老漢が、支那に於ける第一の靈境と、讃美したる丈ありて、喬木森々、巖洞深幽。但だ伽藍突兀たるも、西太后の勸請になる新築にして、其の境致と相副はざるを憾むるのみ。進んで天竺寺に

浮慈寺と石橋

紫陽峰八卦石上の眺望

四湖　吳山第一峰より錢塘江を望む

抵り、踵を廻らして、靈隱寺樓門前にて午餐を喫し。廢殘せる名刹浮慈寺に詣し、雷峰塔下に立ち、徙徊之を久うす。途中石橋に接する毎に、必らず下車す。此地の石橋は、所謂大鼓橋にして、概して中心高く仰げば也。然も途中予は、顚覆の難を免かれたると再度、車夫の無頓著想ふ可く、然も亦た其の矯健驚く可し。

此れより淸波門を出で、車を捨てて吳山々脈を涉歷し、紫陽峰の八卦石上に立ち、東に錢塘江の風帆

出沒を、秋烟淡靄の間に眺め、西に西湖の洲嶼、臺榭、寺觀の扁舟、碧水の間に交錯するを望み、幽賞暫くを知らざりき。斯くて文昌廟、城隍廟、東嶽廟等を過ぎ、錢塘門を入り、杭州城内の市街を一覽し、領事館に歸著したるは、午後五時頃なりき。

瀨上君の爲記念の一詩

瀨上君予に詩箋を出して、記念の爲め、一首を錄せんとを需めらる。乃ち筆を援りて曰く、

青山接水水連灣。菱陌楊堤指顧間。須記荷枯楓老處。
與君終日繞湖還。

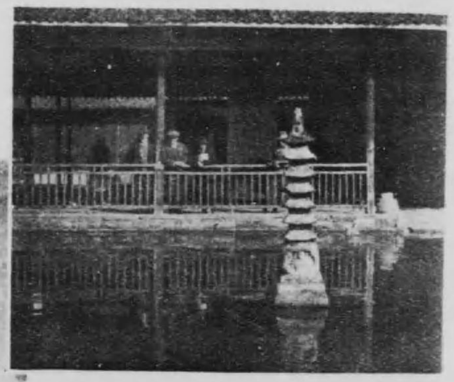
大正六年十一月十九日朝　西湖の曉烟を眺めつゝ認む

寶石山頂に上る

（一一五）名所の保存

十一月十九日は、名殘り惜しくも、西湖に告別せねばならぬ也。されば出發前に、西湖の大觀を得可く、寶石山頭に上れり。紅楓は寺觀、竹林、黃

西湖　西蓮寺



西湖　雷峰塔

西湖

西湖　天竺寺

西湖
靈隱寺の石佛

樹の間に錯り、眞に秋色の人を惱ますもの、多きを須ひざるを覺えしむ。石磴踏み去りて頂上に到れば、保叔塔は、我が頭上を壓して、湖を隔てゝ雷峰塔と相對し、湖上の鎭たり。故人曰く、保叔美人の如く、雷峰老衲の如しと。

西湖　保叔塔

予も亦た之に裏書するに、遲疑せず。然も此の保叔塔を距る數歩の間に、英國宣教師の肺病院あり。吾人は肺病院其物に苦情なきも、此の如き天下の絶景、支那の國寶とも云ふ可き西湖の、然も其の眼目たる地

浙江省長と名所舊蹟の保存

點に、肺病院を措くに就ては、多大の遺憾なき能はず。但だ寶石全山、何時の間にやら、英國宣教師の私有に歸したりしもの、今や浙江省にて、巨資を出して、之を買收したりとは、聊か快聞たるを失はず。然も肺病院と、其側にある宣教師の別莊丈は、其儘に差置きつゝあるは、如何にも九仞の功、之を一簣に虧くものにあらざるなき乎。宣教師たるものの相當の代價にて、之を讓り渡したらば、せめてもの功德ならん歟。

湖山に告別し、瀨上領事と與に、浙江省長齊耀珊氏を訪ふ。氏は都雅の風采ある紳士にして、流石に進士出身の人たるを想はしむ。名所古蹟の保存、英雄忠臣の祠堂の修理、道路の開築等、凡そ西湖附近を中心として、あらゆる方面に手の屆きたるは、之を十二年前に比して、頗る面目を一新したるの感あり。予は氏に向て、此事を語りたるに、氏は事未だ志の如くならざるもの多きを詫びて、更らに竭す所あらんと云へり。概して西湖のみならず、道路の改善せられたるは、支那旅行中隨處皆な是にして、支那名物の一なる惡道路は、今や殆んど其の跡を失はんとす。吾人は翻つて、之を我が日本の道路に比し、自から先進國たるを誇るの、頗る鐵面皮なるを思ふ。

好景と好友と好日

辭して杭州市街を見物し、午後二時半に杭州を發し、七時半に上海に歸著せり。此行、舊友瀨上領事を東道の主人とし、加ふるに連日の好天氣を以てす。好景に加ふるに、好友と好日とあり。人事意の如くならざるも、時に又た此の如き意想以上の事あり。人間生存慾の已む可らざる、亦た所以なきにあらず。

大正六年十一月廿日朝　上海に於て

（一一六）思想界の三分

宗社黨中の學者沈曾植翁

十一月廿日、鄉友西本君と與に、沈曾植翁を訪ふ。翁は宗社黨中の學者也。如何にも無頓著なる風采にて、滔々議論せり。曰く、支那現時概ね權利思想に馳せ、上下唯だ利是れ事とす乃ち日支兩國間の如きも、唯だ權利關係、利益關係のみにて、毫も兩國民を繫ぐ可き東洋道德の共通思想に、重きを措かず。此の如くして、東亞の興隆を望むも、亦た難しと。予が特に意外としたるは、翁が國民新聞の講讀者たりし一事也。去りて姚文藻翁を訪ふ、不在にて踵を回らさんとする折しも、偶〻門前に翁が、其孫の手を携へて還るに會す。翁は十二年前の舊相識也。當時烈暑の際、井手君と與に、約二時間、翁が袁世凱に就て語るを聞けり。曰く、

十二年前の舊相識姚文藻翁

袁の最終の目的は、皇帝たるにありと。當時袁は直隸總督たり、何人も彼に多少の野心あるを猜したるも、未だ此の如く大膽に、且つ峻酷に、彼を評したる者なかりし也。今にして之を想起し、翁と與に之を語り、其言の——偶中にもせよ——如何にも龜卜雷ならざるを嗟嘆せり。翁曰く、袁逝くも、幾多の小袁あり、彼等を一掃するにあらざれば、到底更始一新の業は難からむと。予笑て曰く、果して然らば、是れ死せる袁世凱、生ける支那を支配するもの乎と。翁は日本政府の對支政策に對して、不平の口氣を漏らせり。

讖言の偶中

書に隱るゝ李梅庵

斯くて翁と伴ひ、李梅菴を訪ふ。梅菴は奇男子也。書に隱る。革命の際、彼は南京の布政使として、最後迄踏み止まり、死を睹して、其職を守れり。事去りて後、飄然身に道士の服を纏ひ、一枝の筆管、以て五十餘の子弟を養ひつゝあり。氏書體に於て可ならざるなし、而して漢隸、六朝碑版は、尤も其の長技たり。予は見學の一端として、特に請うて、其の揮毫を

視たり。

＊　＊　＊　＊　＊

支那の現時と思想界の三派

要するに支那の現時は、猶ほ戰國の當時の如く、思想混亂、鼎の沸くに似たり。然も其の大體に就て察すれば、軍國主義を主とする北派、民權自由主義を主とする南派、從來の孔孟主義を主とする復辟派の三派に、區分す可き歟。されど若し支那の分裂を以て、單に思想の分裂より來るものとせば、そは大なる速了の見ならむのみ。

不思議なる支那人種

凡そ世界に支那人の如く、不思議なる人種はなし。極めて現實的にして、且つ極めて空想的也。極めて物質的にして、且つ極めて理想的也。儉約者にして、浪費者也。無頓著者にして、拘泥者也。損得勘定以外に、何物もなしと思へば、却て體面抔と鹿爪らしく、持ち出だす也。啻に一國中幾多の種類を、網羅するのみならず、其の一人に就て見るも、幾多の矛盾せる性格あり。若し支那人を見て、單に其の一端を捉へ、之を以て百

事を律し去らん乎。吾人は大なる悔あらむ。

其の眞面目を知る最もし

蓋し支那人は、複雜したる心理學的の資料也。其の眞面目を知るの難きは、恐らくは廬山の面目を知るの難きよりも難からむ。

大正六年十一月廿一日午前五時半　上海に於て

（二一七）人及び書籍

宛然小李鴻章たる李經邁氏

十一月廿一日、亦た好天氣也。正金銀行兒玉氏の邸にて、午餐去りて鄭孝胥氏を訪ふ、氏亦た復辟派の一人也。更らに李經邁氏を訪ふ、氏は未だ多く四十を出でず。李鴻章の實子にして、其の面目宛然小李鴻章也而して其の機略、權數、人を呑むの概、往々其の應接、言論の端に暴露す氏若し勗めて已まずんば、必らず支那に於ける、一個の人傑たらむ。啻に名家の子弟たるが故のみにあらざる也。

議論極めて痛快

氏の議論は、當否は姑らく措き、極めて痛快也。曰く、段祺瑞の武力解決

は、政策として惡しからず。但だ其人を得て之を行ふ能はざるを奈何。又た曰く、共和政治は、支那に於て尙ほ三百年早しと。更らに氏は歐亞に於ける、帝國的大同盟を夢想せり。惟ふに氏の議論に、共鳴する者あらば、恐らくは大谷光瑞師ならむ。予が玆に之を詳記せざるは、之を紙上に記するには、餘りに重大なればなり。氏は極めて流麗なる英語にて對話せり。予は繰り返し氏が自愛を望む。蓋し議論は別として、予が滯滬中面會し

最も多く印象を與へたる二人者

李經邁氏肖像

たる、支那各方面の人物中、尤も多く予に印象を與へたるは、孫洪伊氏と李經邁氏と也。此の兩人は、善かれ惡しかれ、將來に於て、何事をか做し得可き好漢と思ふ。

ゼスフィルト路公園のプラタナス樹

此より約一時間を偸み、ゼスフィルト路の公園に遊ぶ。地僻境幽、門を入れば、一個のプラタナス樹、天を擎げ、地に蟠り、飛揚跋扈、獨り自から秋光を占斷するものゝ如く、庭を壓して立てり。予は公孫樹の次ぎには、斯樹を愛す。曾て新宿御苑に於て、斯樹を見、樹邊を遶る數回、嘆美清賞、禁ずる能はざりしことありき。而して今見る所、亦た多く之に讓らざる也。

菊蹊窮處竹蹊通

菊花は聊か霜に打れて盛りを過ぎ、楓樹は霜を帶びて、今を見頃の潮合(しほあひ)となす。竹あり、杉あり、曲徑幽蹊、互ひに相交錯す。而して滿園寂々、殆んど人聲を聞かず。

菊蹊窮處竹蹊通。　黃樹堂堂百尺雄。　紅葉滿林人不見。

劉承幹氏の嘉惠堂文庫

會者悉く好古の士

蓋し實況也。

更らに前約を趁ひ、劉承幹氏を訪ふ。氏の嘉惠堂文庫は、今や宋元の舊槧、明清の古鈔、あらゆる珍籍を以て、一方に雄視せり。予は僅かに其の一斑を瞥見したるも、實に自から好書癖を、悔いざらんとするも能はざる也。氏は單に蒐集家のみならず、亦た資を投じて、其の藏書を刻し、後學に嘉惠する所少からず。

會者は主人を始め、數日前京都より還れる羅振玉翁、及び王國維、蔣汝藻、張增熙、葛昌楣、何れも浙江出身者にして、皆な好古の士也。晩餐卓上語る所、概ね風雅の事のみ。予は劉氏の文庫に、數時を費して、數月を費す能はざるを憾みとす。還るに際し、氏は其の刻書數種を贈れり。此日予の爲めに案内、且つ通譯の勞を取られたるは、鄉友、西本君にして、氏に負ふ所多し。

大正六年十一月廿二日午前六時　上海に於て

（二一八）書籍の生命

所謂る古川に水多し

支那は流石に文字の國也。一方には革命騷動の眞中にも、他方には古書珍籍を蒐集して、自から樂しむ者あり。而して流石に、書物の本家本元丈ありて、幾多の爭亂、兵火を經つゝも、尙ほ舊槧、舊鈔尠からず。所謂る古川に水多しとは、此事也。

嘉惠堂文庫中の珍籍

劉承幹氏の嘉惠堂文庫中にて、予が瞥見の際、記憶したる宋槧のみにても、蜀大字本史記あり、紹興板史記あり、前後漢書の大字本あり、袖珍板の禮記あり。特に珍重す可きは、陳壽三國志也。將た宋槧列女傳中に、繪畫を挿みたるが如き、同時代に於ける印畫の標本として、尤も悅ぶ可きが如し。而して翁方綱の四庫全書提要の手稿の如き、亦其の苦心の痕を覗ふに足る。

蔣汝藻氏の藏儲

予は廿二日午前、王國維と約して、蔣汝藻氏を訪へり。蓋し氏も亦た同好の一人なれば也。匆々の際なれども、吳郡圖經續記の如きは、北宋精板にして、海內孤本と稱する丈ありて、洵に立派也。予は此に對して、我が、成簣堂所藏の廬山記が、其の紙質に於て、其の字體に於て、全く同一なるを發見し、心中頗る愉快を感じたり。更に悅ぶ可きは、宋槧の參寥子集也。兩者何れも百宋一廛主人、黃蕘圃の手を經たるもの也。

宋雪巖の忘機集

將た氏が尤も誇る所は、宋雪巖の忘機集也。唯だ是れ眇乎たる一冊にして、嘉熙板にして、宋末に屬するも、洵に比類罕なる本也。而して其詩復た誦す可きものあり。予は氏に向て、切に其の複印を勸告し置けり。將た陸放翁の南唐書を、明の錢磬室が手寫したるものあり。全部同一手に出で、洵に其の筆蹟の美なるを見る。書の卷頭見返しの頁に、左の詩の鈐印あり。曰く、

子孫寶之何其愚

賣衣買書志亦迂。　愛護不殊隋侯珠。　有假不返遭神誅。

子孫寶之何其愚。

是れ前持主、若しくは前々持主の、愛著の餘に出でたるものならむ。されど之を賣る者なければ、之を買ふ者も亦あらざる可し。書籍は天下の公寶也。豈久しく之を私有す可きものならん哉。況んや之を好まざる子孫に強ふるに、之を珍襲、愛護す可きを以てす。是れ天下の公寶を、空しく蠹魚の好餌たらしむるに過ぎざる也。

支那に於ける書籍の生命

要するに支那に於ては、一方に賣り出す者あると與に、他方には購買者あり。書籍の支那に於ける生命は、未だ新學の流行の爲めに、何等の影響をも受けざるものに似たり。

大正六年十一月廿三日朝　上海に於て

（二一九）上海に告別す

上海に十日餘滯留

十一月廿三日。愈〻本日上海を發し、蘇州を見物し、南京を經、浦口より